2009
graph magazine vol. 16

主は、生きておられる

Unser HERR lebt



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません
（ヨハネ3·3）

vol. 16 | 定価100円（本体95円）

巻頭メッセージ
004 教会を建て上げる秘訣 ― ゴットホルド・ベック

3人のメッセージ
022 [特別記事] 高齢者の幸せのために ― 重田 定義
042 神の家 ― 青柳 惇
048 あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。― 仲井間 憲成

3人の証し
054 私自身こそ罪人、と気づかされました。― 藤田 亜紀
060 「私たち」の教会から「イエス様」の集会へ ― 伊澤 聡一郎
065 眠っている人よ。目をさませ。― 松本 啓

インフォメーション ボックス
071 上田利恵さんが、生前に録音した「聖書朗読のテープ」

連載メッセージ
072 「聖書は何と言っていますか」 ― ゴットホルド・ベック
―信仰から離れた人に

各地の集会から
082 こちら川越集会で～す

メッセンジャーの予定表
084 メッセージ当番表（2009年8月・9月）／喜びの集いスケジュール

ビッキーのケーキづくり
086 ブルーベリーマフィン

088 結婚式・葬儀

090 キリスト集会へのご案内

092 キリスト集会出版物のご紹介

住所録
094 キリスト集会のご案内（2009年4月1日現在）

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

巻頭メッセージ

教会を建て上げる秘訣

（マタイ16・13〜25）

ゴットホルド・ベック

私たちの主イエス様は、目的を持たないお方ではありません。いつもはっきりとした一つの目的をもっておられます。

地上のご生涯では、イエス様は、十字架を目指し「死」に向かって行かれました。十字架の上で死の苦しみをお受けになった後、三日目によみがえられ、今は、天の御位に座しておられます。しかしそこで休息しておられるのではなく、御名によって聖霊を遣わし、ご自分の目的を完成しようと働いておられます。では、主イエス様のご目的とは一体何でしょうか。主イエス様ご自身が次のようにおっしゃいました。

わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。

（マタイ16・18）

つまり、その目的は、ご自分の教会を打ち立てることです。ところが、イエス様が今の時代になそうとしているこの目的を、悪魔もよく知っているのです。だからこそ、悪魔はこのみわざがなされるのをあらゆる手段を使って妨害し、主のみわざに逆らって立っています。イエス様の時代から今日まで、何世紀もの間、主が建てようとなさる教会を聖霊によって示された人々は、「教会」に対する非常に激しい悪魔の攻撃を見てきました。

しかし、イエス様は**「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」**（18節）とおっしゃったのです。イエス様は、私たちの心の眼を開いて、ご自身の目的である「教会」を建て上げるために教えることがおできになるのです。もし、そうでないなら、私たちは「わたしの心にかなった者である」という主イエス様からのみことばを、決して聞くことはできないでしょう。

私たちは、主の本当の目的を見せられているでしょうか。悪魔が主イエス様の目的を絶えず意識しているように、私たちも主の目的を、いつも心に留め、考えているでしょうか。多くの人々は、滅びゆく魂を主のみもとに導いて、それを一つの組織、団体に所属させるだけで満足しています。しかし、主イエス様はそれでは満足されません。次のみことばは、「教会」がどのようなところであるかを示しています。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

（エペソ 1・23）

ぜひ、エペソ人への手紙一章の十五節から二十三節までを、「主よ、どうか私の心の眼をお開きになってください」と祈りながら、静かな所でお読みになってください。

今回は、主の目的である「教会」を「建て上げる秘訣」について、三つのことからご一緒に考えてみましょう。第一は「三つの大切な点」、第二は「重要な質問」、第三は「必要な材料」についてです。

‡ 三つの大切な点 ‡

教会を建て上げる秘訣について考えるとき、まず、どうしてもはっきりとさせておかなければならない三つの大切な点があります。それは、「新しい土台をもつこと」、「十字架がなくてはならないこと」、「主イエス・キリストの絶対的なご支配」ということです。

1 新しい土台をもつこと

教会は「新しい土台」の上に建てられることを、私たちは忘れてはなりません。主イエス様が「わたしは・・・わたしの教会を建てます」とおっしゃったのは、ピリポ・カイザリヤの地方でした。この地方は首都エルサレムから最も遠く離れた地域で、ガリラヤ湖から北方にかなり入ったところにあります。主イエス様はなぜこのような遠く離れた場所で、「教会を建てる」という、ご自分の目的を明らかにされたのでしょうか。それは、ご自身の目的が、それまでの古い伝統とは一切関わりのない、「新しい土台」を持つものであることを教えるためでした。その当時ユダヤには、パリサイ派、律法学者、サドカイ派などの宗教組織があり、宮にまつわるいろいろな古い伝統が大切にされていました。しかし、主イエス様はご自分の教会をこのような古い土台の上には建てないことを、弟子たちにわからせる必要があったのです。

「教会」は、「主イエス様の教会」でなければなりません。ですから、イエス様は「新しい土台」を据えられたのです。この土台は、主イエス様ご自身です。ペテロは主に向かってはっきりと「あなたは、生ける神の御子キリストです」（マタイ16・16）と申し上げました。

このペテロの告白は「教会の秘密を解く鍵」のようなことばです。このことばは、教会のかしらが主イエス・キリストであることを言い表しています。

教会のかしらであるイエス様は、父である神から遣わされたお方ですから、イエス様のからだである教会も、神から生まれたものでなければならないことは言うまでもありません。主イエス様の教会は「肉の欲によらず、血筋によらず、人の欲にもよらず、ただ主である神によって生まれたもの」でなければならないはずです。

言い換えるなら、「教会」は決して人間の作った組織であってはなりません。人間は一つの団体を組織して、そこで聖書を学ぶことはできますが、それは生きた「キリストのからだである教会」とは言えません。教会は「主である神によって生まれた、ひとつの生きた有機体」であるべきなのです。伝統や人の知恵によって生まれ、人間の努力やこの世の力によって支えられている教

会は、まことの教会とは言えないのです。「教会」とは、この世から「召し出された人々の集まり」という意味です。ですから、教会がこの世にしばられ、この世と調子を合わせていてよいはずはありません。

教会を建て上げていくためには、第一に、新しい土台が必要であることを見てきましたが、次に「十字架がどうしてもなくてはならない」ことをご一緒に考えましょう。

2 十字架がなくてはならないこと

イエス様はご自分が十字架におかかりになることを、ピリポ・カイザリヤの地で、弟子たちにはじめて明らかにされました。マタイの福音書16章21節を見ましょう。

その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。（マタイ16・21）

主イエス様は、ご自分の教会を建て上げていくために、十字架を経験されたのです。

「多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえる」ことを、主ご自身はご存知でした。主イエス様はご自分のいのちを捨てることを通してはじめて、ご自分の教会を打ち立てることがおできになりました。主イエス様とともに教会を建て上げようと働く人は、「教会を打ち立てるために主イエス様は死に渡されなければならなかった」という事実を知らなければなりません。そして、主イエス様とともに十字架につけられた者だけが、主とともに働くことができるのだと言えましょう。教会を打ち立てるために何よりも大切なことは、自分自身が主イエス・キリストとともに十字架につけられて、「この私」が死に渡されるということです。パウロのように「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。**」（ガラテヤ2・20）と言えるようになる必要がどうしてもあります。イエス様の教会を建て上げるためにしなければならないのは、いわゆる奉仕ではなく、十字架を負って、主に従うことです。

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。（マタイ16・24）

いつ、教会が打ち立てられるのでしょうか。それは、私たちが主の御心は何であるかを知り、その御心のなるためには、自分自身はいくら悩み、苦しみ、誤解されてもかまわないと、覚悟を決めるときです。そのときにこそ、イエス様の教会が建て上げられていきます。

ところが、多くの人々は熱心に主のために働き、仕えようとしながら、実は、「わたしはわたしの教会を建てる」と言われる主の御心について深く知らないのです。これは一つの悲劇と言えるでしょう。また、ある人々は、喜んで福音を宣べ伝えることはしますが、十字架を負って主イエス様にどこまでも従って行くことはしません。「**収穫は多いが、働き手が少ない。**」（マタイ9・37）というみことばがあります。しかし、今一番大きな問題は、働き人の少ないことではありません。働き人の数より、質が問題なのです。

主イエス様は、ご自分の教会の土台を据えるために死に向かわれました。私たちも主とともに十字架につけられ、すべてを主に明け渡しましょう。そのときはじめて、主とともに主の教会を建て上げることができる者となるのです。

教会を建て上げていくためには、まず「新しい土台」が必要であり、「十字架がなくてはならない」ことを見てきました。次に、「主イエス・キリストの絶対的なご支配」が必要なことを、さ

らにご一緒に考えましょう。

3 主イエス・キリストの絶対的なご支配

主イエス様は「一つの教会を建てる」とおっしゃったわけでは決してありません。「わたしの教会を建てる」と言われたのです。イエス様は、私たちがイエス様とともに教会を打ち立てる仕事にたずさわることを許してくださいました。しかし、たとえどんな人であっても、人間には「教会」を自分のものとして所有することは許されていません。主イエス様の教会はあくまで主イエス様の教会であり、所有権は絶対的に主イエス様にあります。

イエス様はご自分の教会を、あるミッションのため、ある団体や組織のため、またはある国民のために建てようとは言われませんでした。イエス様は、ご自分の教会を建てる、とおっしゃいました。

ときどき、「私は主のために働いている。私は教会をもっている」と言う人々に会いますが、人間が主に教会を与えるというのは不可能です。主イエス様はご自分の教会をご自身で建てるとおっしゃっています。

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。（エペソ 5・27）

教会の所有権は、ある組織やある国民がもつのではありません。教会はただ主イエス様のものです。教会はある宣教師やある牧師が支配してよいものではなく、すみからすみまで、主のものです。教会は「聖霊の宮」、「主である神の御住まい」、「御子イエス・キリストの花嫁」です。これは私たちにとって何を意味しているでしょうか。

それは、たとい私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。（1テモテ 3・15）

このみことばからわかるように、私たちにとって大切なのは、

教会を建て上げる秘訣

どのように教会を導くか、どのように教会を治めるか、どのように教会を助けるか、などということではなく、自分自身が「神の家」で「どのような生活を送るべきか」だということがよくわかります。教会は「神の家」であり、主である神ご自身がそこに住んでおられます。教会はすみずみまで、主のものです。ですから、教会を支配したもうお方は、主イエス様ただおひとりであるべきです。

イエス様は教会のお客様ではなく、教会のかしらであり、支配者です。ですから、教会は主イエス様のみことばを行い、主イエス様の願いを満たしていくはずのものです。私たちはそのように「神の家」で行動できているでしょうか。

これまで、どうしても知らなければならない三つのことをともに学んできました。その一番目は、教会の土台は伝統や組織ではなく、新しい土台、主イエス様ご自身であることでした。教会のかしらであるイエス様は、天から来られましたから、からだである教会も上から生まれたものでなければなりません。教会は「天的な有機体」として、地のものとは何の関わりも持たないものです。二番目に、教会建設のみわざは、キリストとともに死に、日々、自分の十字架を担ってイエス様に従って行く者だけが、たずさわることができるということも見てきました。三番目は、教会の所有権は主イエス様にあり、イエス様だけが教会をご支配なさるべきだということでした。私たち自身の場合も、ある人、ある組織、ある団体、ある教派に支配されるものではなく、すべてが主イエス様のものであるべきです。

以上の三つの大切な点に続いて、次は「重要な質問」についても考えてみましょう。

‡ 重要な質問 ‡

私たちは主イエス様とともに働く者となっているでしょうか。それとも、主イエス様の働きを妨げる者となっているのか、どちらでしょうか。この重要な質問について、ご一緒に考えてみましょう。

「わたしは、わたしの教会を建てよう」とおっしゃったイエス様だけが、この「霊の宮」を建てることができます。どんな人間にもこれを建てる力はありません。私たちは主とともに働くことができます。しかし、主導権は常に、主にあるべきです。人間が自分の思い通りに、あそこに、ここに教会を建てようと言うことはできません。

パウロでさえも自分で教会を建てることは出来ませんでした。パウロはタルソという大きな都市で生まれましたが、その町でも、証しし、伝道したに違いありません。人間的に考えれば、自分の生まれ故郷に教会を建てたかったことでしょう。しかし、パウロはやがて、バルナバに導かれてタルソからアンテオケに行き、そこで素晴らしい教会を打ち立てることになったのです。もちろん主がお働きになったのですが、パウロは自分がどこで働くか、主の導きによらなければ決められず、自分で好きな所を選ぶことができなかったのです。パウロは、主の目的と計画、つまり、イエス様がご自分で自分の教会をお建てになることを知っていました。だから、パウロはイエス様にその身を任せ、導いていただき、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」(ガラテヤ2・20)という態度をつらぬいたのです。私たちもまた、パウロと同じように主とともに働く者になりたいものです。

しかし、もし、主イエス様のみわざの邪魔をし、用いられないような者になったら、まことに悲しむべきこと、わざわいだと言わなければなりません。私たちが警戒すべき、主のみ手を縛り、主の働きを妨げる三つの霊があります。それは、「自己中心の霊」、「二つに分かれた霊」、そして、「狭量な霊」、つまり、狭い心の他者を受け容れない霊です。次にこれらについて考えましょう。

1 自己中心の霊

主イエス様は「あなたを建て上げる」とは言われずに、「わたしはわたしの教会を建て上げる」とおっしゃいました。もちろん、主イエス様は私たちを祝福してくださいます。しかし、それは他の人々に私たちを通して祝福が及ぶためのものです。もし、私たちが自分たちだけの祝福を願い求めるならば、それは、主イエス様のみわざを妨げることになります。

弟子のペテロにも、その態度が見られました。主イエス様が「わたしはわたしの教会を建てる」と言われたのに、ペテロは主イエス様のみわざを妨げようとしてしまいました。ペテロは自分のことばかりを考えていましたから、イエス様がご自分は十字架につかなければならないと話されたとき、そんなことになってしまっては困ると恐れ、十字架へ向かおうとするイエス様を引き留めようとしました。

するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

(マタイ16・22、23)

ペテロは、自分のことを中心に考えたために、主のみわざを押しとどめるようなことをしてしまったのです。

2 二つに分かれた霊

二つに分かれた霊も、主のみわざを妨げます。私たちは妥協

することなく主に従わなければなりません。主の恵みによって導かれ、救われた人々が、お互いに平和の絆をもって結ばれ、愛の交わりがあってこそ、教会は成り立っていきます。これは決してたやすいことではありません。まことの愛をもつことは、難しいことです。しかし、私たちは自分たちの足りなさ、心から愛することの難しさに目を留めず、「主の恵み」がそれをなしてくださることに、目を留めていきましょう。

確かに、いわゆる一致を図るために、真理を曲げることはできません。主の御心と反対の思いをもっている人々と、妥協してまで交わっていくこともできません。

しかし、いかに真理のためでも、兄弟姉妹に対して、愛のない立場をとってはなりません。たとえ兄弟姉妹が自分とは違う考えをもっていても、その人の上に立ってその人を裁くようなことがあってはなりません。絶えず愛をもって、平和の絆をもって、一つの霊に結ばれていかなければなりません。これがまことの愛であり、この愛がなければ、主イエス様の教会は建っていきません。教会を建て上げていくことは、決して簡単なことではないのです。

3 狭量な霊

狭量な霊も、主イエス様の教会を建て上げる邪魔になります。主イエス様は各地にあるすべての教会を見渡し、ご自分の教会を建てようとなさっておられますが、「多くの教会を建てよう」とは言われませんでした。「わたしはわたしの教会を建てる」とひとつの教会を建てることを願っておられるのです。この主イエス様の言われる「ひとつの教会」は世界的なものです。

ある人々は、「日本人の教会」を建てようと考えています。そして日本人でないものは、外国人だからという理由で、教会から締め出そうとします。彼らは、日本の教会は日本人が責任をとるべきだ、と考えています。この人々は、教会は「ただ主イエス様のものである。決してある特定の国民のもの、個人、団体のものではない」ということを知らない人々です。

主のみことばをよく聞いて、まことの教会が何であるか、心の目で見ることができなければ、主のまことの働き人となることはできません。狭量な霊は、主イエス様の御手を縛り、その働きを妨げます。

‡ 必要な材料 ‡

では、教会を建てるためには、どのような材料が用いられるのでしょうか。それは「ペテロのような男」です。主イエス様はペテロに「あなたはペテロである」と言われ、すぐそのあとで、「わたしはわたしの教会を建てる」と言われました。

ペテロは上よりの啓示によって、主イエス様がどのようなお方であるかを教えられ、人間が変えられていきました。ペテロのように御父の啓示によって主を知った人々を、主は教会を建てるために必要としておられるのです。

シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。・・・・・」（マタイ 16・16〜18）

主イエス様はペテロをいつも「バルヨナ・シモン（ヨナの子シモン）」と呼んでおられました。ペテロの父親、ヨナはどんな人だったのでしょうか。聖書はペテロの父親について何も教えていません。それを知っている者も、誰もいません。シモンは誰にも知られていない、ふつうの人の息子で、名もない人でした。主は

このようにありふれた人物を、教会を建てるためにお用いになります。

主イエス様は、シモンが生まれながらの力に頼っている間は、主のみわざを助けるどころか、妨げになるので、彼を召し出すことができませんでした。しかし、イエス様はシモンの生まれながらの人だけを見ないで、このだめなシモンをご自分の恵みによって作りかえることができることを、よく知っておられたのでした。シモンは、「バルヨナ・シモン（ヨナの子シモン）」のままではいませんでした。やがて彼は変えられ、主に「あなたはペテロです」と呼ばれるようになったのです。シモンはキリストにある、新しい人間に生まれ変わりました。

人の心は、主イエス様をよく知ることによって、変えられていきます。主イエス様は私たちにとってどのような方であるか、また、私たちのうちにどのようなみわざをなされるお方であるかを知り、それにもとづいて歩んで行くなら、そのような人を、主イエス様は教会を建てる材料としてお用いになることができます。

もう一度、お聞きします。主イエス様は、どのような人を教会を建てる材料としてお用いになることができるのでしょうか。主は、ペテロのような人を教会を建てるための材料とされます。ペテロのような人とは、第一に「信仰に堅く立って動かされない人」であり、第二に「強い人で」あり、第三に「霊的な人」です。このような人について、これから、少し詳しくみてみましょう。

1 信仰に堅く立って動かされない人

シモンのように、はじめは使い物にならなかった人が、主の恵みによって「ペテロ」と呼ばれる男に変えられました。「ペテロ」という意味は、「岩」ですが、岩のように文字通り動くことのない者に彼は変えられたのです。教会を建てるためには、はっきりとした立場をとる、動かされることのない性格の持ち主が必要です。かつては、ペテロは海の砂のように定まりのない、信頼のおけない人物でした。ある時には主を思い、その次の瞬間には主から目を離し、人のことを思うといった人間でした。

しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。

「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

（マタイ 16・23）

ペテロは、天の父である神の啓示によって、神の子を知らされた直後に、サタンの手に用いられるといった状態でした。これは、彼の性格が弱く、まことに信頼のおけない人物であったことを表わしています。このシモン・ペテロが、一体どのような経験を通して変えられたのでしょうか。それは、「十字架」と「五旬節」の経験です。

私たちの場合も生まれながらの性質は、本質的に神に反抗するものを持っています。その人の持っている一番良い性質ですら、教会を建て上げる奉仕には何の役にも立ちません。私たちはパウロのように、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」という経験を得て、全生涯を御霊のご支配のうちにゆだねるのでなければ、シモンのように、揺れ動く、不安定な砂のような状態にとどまり、決して岩のような確かな歩みをすることはできません。

主イエス様は、まだ五旬節の経験をしていない弟子たちに、ご自身をすべてまかせることがお出来になりませんでした。「十字架」と「五旬節」を経験する前の弟子たちは、信頼のできない、神中心ではなく、自己を中心とする人々ばかりでした。その弟子たちに、自分がキリストであることを誰にも言ってはいけないと主は戒められました。

そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。

（マタイ 16・20）

教会を建て上げる秘訣

私たちはどのようにしたら、信頼のおける堅く信仰に立つ者となることができるのでしょうか。

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

（マタイ 16・24）

ペテロは十字架と五旬節を通されてはじめて、岩のように動くことのない者になりました。彼は自分自身で自分を「ペテロ（岩）」と呼んだわけではありません。主が「ペテロ（岩）」という名前をつけてくださったのです。人間は、自分でどんなに努力しても、自らを信頼のおける人間にすることはできません。

すると、ペテロがイエスに答えて言った。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。

（マタイ 26・33〜35）

しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる。」と言った。すると彼は、「そんな人は知らない。」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。

（マタイ 26・73、74）

主イエス様は、シモンに「ペテロ（岩）」という名前をおつけになり、そうすることによって、ご自分が、揺るぎやすいシモンを、やがて岩のように動かない者に作りかえることができることをお教えになったのです。

ペテロは名前だけでなく、その性質を変えられました。この経験をした者を通して、主は教会をお建てになるのです。生まれながらの弱い性質をもったままにとどまっている人は、主のみわざを妨げ、主のみ手を縛ってしまいます。十字架により、自己から解き放たれ、聖霊のご支配に身を任せた人々だけを、主はご自分の教会を建てるためにお用いになります。

もし、私たちがこのようにつくりかえられていかなければ、兄弟姉妹の交わりは何かの「クラブ」のような社交場にとどまり、決して「教会」とはなっていかないでしょう。

2 強い人

パウロはエペソ人への手紙の中で、「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。」（エペソ3・16）と祈っています。もし、私たちが主の御心にかなった教会でありたいと思うなら、私たちには主からいただく強さが必要です。

シモンは、この主からいただく神の強さをもっていませんでした。それで、心から主に従おうと決心したにもかかわらず、その時に反対のことをしてしまいました。シモン自身はそんなに弱い男ではありませんでしたが、彼を生まれながらの性質のままに引きとめ、地に落とそうとする悪魔の力に対抗できるほどの、十分な強さはもっていなかったのです。しかし、「十字架」と「五旬節」を経験して、「強い人」へと変えられました。

五旬節のあとも、悪魔の力は弟子たちに強く働きかけましたが、すでに変えられた弟子たちを用いて、主イエス様はピリポ・カイザリヤで約束なさった通り、死の力に打ち勝つ教会を建てられました。

この闘いは、こんにちまで続いています。私たちも、ともに一つになって、心を合わせて生活し、主にこれこそまことの教会であ

ると認められるような教会に建て上げられていきたいものです。そのために、主が私たちを「十字架」の経験と聖霊の満たしにより、強い人としてくださるなら、何と幸いなことでしょう。

3 霊的な人

第一コリント人への手紙十章に、霊の岩のことが出てきます。

みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。（1コリント 10・4）

「岩」は御霊である、と書かれています。ペテロは、生まれながらの性質のままである肉的な信者から、神中心の霊的な信者に変えられるという段階を通らなければなりませんでした。そうなる以前のペテロは、人間の思いでことをなそうとして、主イエス様に「邪魔をする者」と呼ばれたのです。主イエス様の教会は「霊の家」です。

あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。（1ペテロ 2・5）

教会は「霊の家」ですから、それにつらなる信者もみな、「霊的」でなくてはならないはずです。ところが残念なことに、多くの人々は「霊的」とはどういうことか、正しく理解していないようです。何か漠然としたものを考えているようですが、これは誤りです。

主イエス様は霊的なお方でした。主イエス様は心にあることをそのまま話され、お語りになったことを、身をもって成していかれました。主イエス様は、私たちにも口先だけの従順ではなく、父のみことばと、みむねに心の底から従い、体現していくことが父の御心であることを教えられたのです。

主イエス様が建て上げようとしておられる「まことの教会」は、兄弟姉妹が心をひとつにして、ともに礼拝を捧げ、祈る人々の集まりです。「まことの教会」であるためには、それにつらなる肢体である、ひとりびとりが霊的でなければなりません。同じ霊、同じいのち、同じ思いをもって、主の御栄えのために、心を用いていくものでなければなりません。

主イエス様の教会を建て上げていくということは、第一に、内面的、霊的な事柄であり、外面的なことは第二、第三の問題であるべきです。ですから、まず大事なことは、兄弟姉妹が、御霊に満たされ、日々、時々刻々、主のみ姿に似せられていくことです。

私たちも、主の霊に満たされ、造りかえられ、主のみ姿に似せられて「まことの教会」になりたいものです。そして、私たちひとりびとりが、主イエス様のからだの一部として、「キリストのみからだである教会」に欠けたところがなくなるまでに「教会」を満たしていく者となりましょう。

教会を建て上げる秘訣

特別記事

高齢者の幸せのために

重田定義

第二五回「ハーフ　センチュリー　モア」介護研究会（二〇〇八年七月一七日）における講演の全文です。老人施設の介護職員を対象に語られたものですが、広く高齢者の方々に読んでいただきたい内容です。

私事で恐縮ですが、私は今月で八十一才七ヶ月になりました。

この私が「高齢者の幸せのために」という題でお話しができるのは、高齢者にとって何が最も大切な幸せであるかを、高齢者である私自身がよく知っているからだと思っています。そういうわけで、これから私自身の学んだこと、体験したことを含めてお話ししたいと思います。

長寿という言葉があるように、かつては長生きをすることと自体が幸せであるとされ、七十歳ともなれば家族一同が古希の祝いをするというのが日本の昔からの習慣でした。古希とは古来稀ということで、中国の有名な詩人杜甫が「人生七十古来稀」と詠んだ詩から取ったものです。

しかし、高齢者の人口が著しく増加した今日では、七十歳まで生きる人は稀どころかどこにでも見られるようになりました。

一、長生きは幸せか

では、このような高齢者時代に生きる老人が、みなさん長生きしていることを喜び、幸せかといえば、悲しいことにそうとは言えないのが実情です。

少し前になりますが、朝日新聞に「いのち長き時代に」という特集が連載されました。

この特集が主張しているのは、長生きするということが、いかにたいへんかということです。

その記事の中から二つの例を紹介します。

その一。妻に連れられて七十六歳の老人が相談室にやってきた。来た時この老人のぼけの症状は中程度に進んでいた。医者の前に二人は並んで座った。妻は嘆いた。「ぼけたから、デイ・ケアに行ってくれたらいいのに、言うことを聞いてくれんのです」医者がとりなした。「だれでも、ぼけることはあるんですよ。偉い人でも長生きすれば、ぼけるしね」そして続けた。「奥さんだって、ぼけるかもしれませんよ」無表情だった老人がその医者の言葉に反応した。「そしたら、ざまみろと言ってやりますわ」意外な言葉に妻は驚いた。しかし医者はその一言の意味を理解した。医者は妻を差し置いて老人と話し始めた。「物忘れについて奥さんから何か言われることはありませんか」「ある」。「叱られている感じですね」「そうだ」。「ぼけたこと周りに知られたくないですよね」「ああ」。呼び水に誘われるように、老人は心のうちを語り始めた。「物忘れして情けないことですわ。今までのように話せんようになって、仲間うちに出ると辛いもんで、外にも出なくなりました」。夫の言葉を妻は目を見張るように聞いた。ひどい言葉を浴びせてきたわけではない。でも、ささいな言動が夫に悔しい思いをさせていたのだ。そんなことは考えもしなかった。妻はポツリと医者に言った。「もう何もわからないと思っていました」。この例は認知症の人でも自分を理解してくれる人には心を開くということを私たちに教えてくれます。

その二。若いころから「おしゃれの清二さん」と呼ばれていた老人は、八十を過ぎても一人暮らしを続け、みんなに感心された。ほかの老人とは違うという自負があった。だが、老いは容赦なくやってくる。八十九歳のある日、自宅から行きつけの喫茶店まで、いつものように自転車を走らせた。気がついたときは路上に転んでいた。足をついたのに、片足で体重を支えられなかった。通行人に助け起されたとき、清二さんは「自転車はもう無理や」と思った。この年で自転車に乗れることは自慢だった。その自慢の足をあきらめなくてはならない。昨日までできていたことが今日からできなくなる。これが老いなのかと寂しくなって、だれもいない家で泣いた。足腰はすっかり弱っていた。長女が手押し車を買ってくれた。でも、どうしても使う気にならなかった。目も耳も衰えた。ますます追い詰められ、自分の殻に閉じこもった。思わず口走ったこともある。「生きていても仕方ない、死んでしまいたい」それでも外では見栄を張って「幸せ」をつくろった。これがその記事の内容です。

昔から人間の最大の願望は不老長寿でした。医学医療はその人間の願望をかなえるために進歩してきたといってよいでしょう。しかし高齢者のこのような実例を見ると、私たちがこれまで漠然と長生きは幸せと考えていたことは当たっていないと思わざるを得ません。

すでに約三千年前に、世界一の知恵者と言われたソロモン王は次のように警告しています。

人は長年生きて、ずっと楽しむがよい。
だが、やみの日も数多くあることを忘れてはならない。
（伝道者　11・8）

長生きをして楽しもうと思って長生きしても、そこにはやみの日、すなわち、老いて心身が衰え、苦しみ悩む日が多いことを忘れないように、という警告です。もちろん、家族に囲まれて幸せそうに見える老人も少なくないでしょう。しかし、一見幸せそうに見える老人であっても、からだの衰え、頭の衰えを知った心の奥底にある寂しさ、悲しみは身近にいる家族にもなかなか理解できないのは今の例のとおりです。まして、そのような老人の心のうちを理解して慰め、心の悩み、寂しさを取り除いてあげることは最も親しい家族でも難しいのではないでしょうか。

以上のことから、私たちは高齢者医療にしても福祉にしても、また介護にしても、人間のできることは高齢者の外側の部分にしか及ばないことを認めざるを得ません。

では私たちのできることは無いのでしょうか。あります。

それは高齢者を心から愛するということです。今お話ししたように高齢者はだれでも、それが表面に現われても現われなくても、心に孤独感や心身の衰えに対する不安、恐れ、ひいては死に対する恐れや不安を持っています。このような高齢者が幸せと感じるのは、自分が愛されている、受け入れられていると実感するときです。これによって心に安らぎが、喜びが、希望が生じるからです。かつて私自身次のような体験をしました。

二、人の愛と神の愛

私が東海大学に勤めていましたころ、同僚に渡辺泰教授という癌の遺伝を研究していた分子生物学者がいました。しかし、その彼は前立腺がんに罹り、脳に転移して目が見えなくなり、死を待つばかりの状態になってしまったのです。

そのようなときに、私は彼に呼ばれて病室に行きました。入ったとき私が見たのは彼が夫人の手をずっと握って離さない光景でした。彼は死を前にして、目が見えない真っ暗闇の、孤独の恐怖から逃れようとして、ただ夫人の手を握り続けていたのです。彼は私が信仰を持っている人間であることを、かつて私が書いた「私たちの国籍は天にあります」という本を読んで知っていて、藁にもすがる思いで私を呼んだのだと察しました。

私は彼に「先生、あなたももうわかっておられるように、いつかご夫人の手を離さなければならない時が来ます。しかし、たった二人だけ永遠に先生の手を離さず、しっかり捕まえていてくださる方がいます。その方は先生が神などいないと言っていた、その先生を愛してくださる神様ですよ」と言って、罪とは神などいないと言い張って自分勝手に、自分中心に生きることであり、その結果として人間は死ななければならないこと、そして、そのようなわがまま勝手な人間をも愛し、罪を赦して死から解放し、永遠のいのちを与えて天国に迎え入れてくださるために、神はご自分のひとり子の神イエス・キリストを人としてこの世に遣わし、人間の罪を身代わりに負わせて十字架にかけてくださったことを話しました。黙って話を聞いていた彼は、「天国には行きたいが、自分は仏教徒だからいまさらキリスト教を信じるわけにはいかない」と言いました。

私は天国に入るにはキリスト教という宗教を信じる必要はないこと、ただ神様に心からごめんなさい、ありがとう、よろしくお願いしますと祈れば、神はその祈りを聞き届けてくださり、天国に迎え入れてくださることを話しました。そして、「よかったら私が先生に代わって神様に祈るから、先生も心の中で私に合わせて祈ってください」と言って次のように祈りました。

「神様、今まで神などいないと言って生きてきた傲慢な私をお赦しください。そしてそのような私をも愛してくださり、私の罪の身代わりに御子イエス・キリストを十字架につけてくださったことをありがとうございます。これから私のいのちをあなたにゆだねますから、よろしくお願いします」。祈りを終えたとき、閉じていた彼の目から涙があふれ出たのを見ました。

それから数日後、私が学会で東京を離れていた間に、渡辺教授が亡くなったという知らせを受けました。葬儀に出られなかった私に、葬儀直後夫人から手紙をいただきました。それには、私とともに祈られてから、それまでいつもいらいらしていた先生が、人が変わったように穏やかになり、亡くなるまで、とても安らかであったという報告と感謝が書かれていました。その手紙から私は渡辺教授が神に愛されているという幸せを得られたのだという確信が与えられたのです。

ここで愛には二つの愛がある、ということをお話ししたいと思います。一つは人間の愛、一つは神の愛です。私たちが普通考えている愛は人間の愛です。

人間の愛は愛の対象を限定するという限定的な愛、自己犠牲を嫌う自己中心的な愛、自分が愛するから自分も愛して欲しいと相手に要求する見返りを求める愛です。これについて具体的な例をお話ししましょう。

かつて私が医学部で倫理委員長を務めていたときのことですが、腎移植が必要な患者に、自分の腎臓を提供したいと申し出た家族の方々に対して、その気持が本当に自分の意思から出たものかどうかを確かめたことがあります。そしていのちの危険を冒してまでも愛する家族のために自分の腎臓をあげたいという愛の深さに感動を覚えました。

しかし、そのとき私はいつも一つの質問をしました。その質問とは「もしあなたが腎臓をあげようとする相手が愛する親や子、あるいは夫や妻ではなく、見ず知らずの他人だったらどうしますか」というものでした。それに対する答えは、表現は異なっても内容は同じでした。

それは例外なくすべての人が「他人には痛みと危険を冒してまでして自分の大切な腎臓を提供することはできない」というものでした。この答えを非難することはだれもできないでしょう。

しかし、このように人間は愛の対象を限定してしまうのです。

聖書には、

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

（ヨハネ　15・13）

とあります。そのとおり、最高の愛は自分のいのちをさえ惜しまない自己犠牲の愛です。

二つある腎臓でもその一つを提供するのには自己犠牲が必要です。しかし、もし仮に一つしかない心臓を提供するとなると、文字通りいのちを捨てなければなりません。実際にはそのようなことは赦されていませんが、たとえ赦されたとしても、いのちを捨ててまでも自分の心臓を他人に提供したいというような大きな愛を誰が持てるでしょうか。ここに人間の愛の限界があります。

十数年前に亡くなりましたが、かつて優れた内科の医師であり、大阪大学の総長もされたことのある山村雄一教授は、ご自分の座右の銘として、人を愛すること、人を信頼すること、人を赦すことの三つを挙げられました。そしてその理由を次のように説明されました。

「人生において人間関係ほど大切なものはない。しかし、それをいかに築き上げ、どのように維持するかということは難しい。私はこのために次の三つのことを提唱したい。まず人を愛することである。それは人が生きて行くうえで最も大切であろうが、また容易なものでもない。医者が大ぜいの患者に接するとき、あるいは教授が教え子に接するとき、その一人ひとりに心からの愛情を持っているといえば、うそになる。しかし、愛のない医者と患者との間、愛のない教師と学生との間には、まことの人間関係は成立せず、医者となり、教師となった甲斐はなくなるだろう。ところで真の愛ということを突き詰めて行くと、その背景に人を信頼するということがなくてはならないことに気づく。砂漠の太陽に似た灼熱の恋も、色褪せてみれば動物的感情のみ残っていたということは、愛に信頼が伴わなかった場合であろう。だが、人を信頼するということも、言うは易しいが実行は難しい。世の中で人が人を信頼することの難しさは時代とともに増大

している。このような人間関係の中で、人を信頼するためには、人を赦す心がなくてはかなわない。しかし、人を赦すことも難しい。人によっては最も難しいと言うかもしれない。それができれば、なにもかも問題ではないと言われるかもしれない。このように、考え方によっては最も難しい人を赦すということを可能にするには、最初に戻って人を愛することである。人を愛するということが初めにあれば、人を赦すことができるであろう。」

これをお聞きになった方はどなたも山村先生がたいへん誠実な人格者であることがお分かりだと思います。しかし、ここで気がつくのは、人を愛するためには人を信頼しなければならず、そのためには人を赦さなければならず、そのためには最初に戻って人を愛さなければならないというように、この三つは互いに輪のようにつながって限りなく堂々巡りをしてしまうということです。どうして私たちはこの輪を断ち切ることができないのでしょうか。

それは先ほど申しましたように、私たち人間の愛には限界があるからです。私たちは自分を愛してくれる人は愛することができます。また、愛する相手に自分を愛するように求めます。

私たちは自分を嫌っている人を愛すること、自分を憎んでいる人を愛することはできません。

このように人間の愛はいつも限定的であり、見返りを求めます。人を本当に愛するには自己犠牲が伴います。しかし、私たちは生まれつきの自己中心、自己本位の性質ゆえに、自分が大きな犠牲を払ってまで人を愛することはできないのです。

聖書には、

自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。

（ルカ　6・32）

とありますが、これが人間の愛なのです。

この愛に対してもう一つの愛があります。それは無償の愛、自分を犠牲にする愛であり、その愛はイエス・キリストの十字架によって示された神の愛です。聖書にはこの神の愛について語られているところがたくさんありますが、そのいくつかを紹介します。

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。

（イザヤ　49・15、16）

神はこのように決して変わることのない愛を私たちに誓っておられます。この神は、聖書に、

偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。

（詩篇　115・4～7）

とあるように、私たち人間が考え、作り出した宗教の神や仏、木や石や金属で作ったいのちのない偶像の神や仏ではありません。目には見えませんが私たち人間一人ひとりに「あなた」と呼びかけて、母親が自分の子を愛する愛よりもはるかに大きな愛をもって愛してくださる人格を持った、生きた神なのです。その証拠として私たち人間に対するその大きな愛を、ご自分の御子イエス・キリストのいのちを犠牲にしてくださるという形で現実に示してくださったのです。

これについて聖書は次のように記しています。

神は、実に、そのひとり子（イエス・キリスト）をお与えになったほどに、世（この世に住む私たち人間）を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに（神の）愛がわかったのです。

（1ヨハネ　3・16）

三、ケアとキュア

ところで皆さんの仕事が高齢者の日々の介護、ケアであることは改めて申すまでもありません。ケアという言葉には心配する、思いやるという意味があります。このことから介護するには相手に対する心配り、思いやりの心が求められなくてはならず、その根底には無償の愛、自己犠牲の愛が必要となります。ここでケアとキュアについて少しお話します。

キュアとは治す、癒すという意味です。まだ医学が未発達だった中世までは、病気になっても治療の手段がないため、キュアよりもケアに重きを置いた医療が行なわれていました。

日本には昔から「手当てする」という言葉が治療の意味で使われていたことからもわかるように、痛む患部に手を当てるというケアの行為が医療行為としてあったのです。中世にはヨーロッパでは病人は修道院に収容され、尼僧たちによって神の愛に基づく手厚いケアが行なわれていました。これが病院の原点です。

しかし、十八世紀から十九世紀、さらに二十世紀にかけて医学は科学技術の発達とともに急速に進歩し、病気は科学技術に支えられた医学によってキュア、治すという考えが支配的になり、医療の場におけるケアとキュアの関係は逆転し、キュアが中心的役割を演じ、ケアは補助的役割に甘んじることになってしまったのです。

病気は科学に支えられた医学技術によって治すことができるという、人間のおごり高ぶった思いに対し、すでに十六世紀における近代外科学の開拓者として有名なフランスの外科医アンブロワーズ・パレは次のような二つの言葉を残しています。

その一つは「私が処置をし、神が癒す（キュアする）」というもので、もうひとつは「私はときには癒すが、和らげることはしばしばできる。だが病む人に慰めを与える（ケアする）ことは、いつでもできる」という言葉です。これらの言葉は医療にケアの心を失った現代医学、医療に対する戒めとして、今日でも高く評価されています。

四、生活の質といのちの質

ところが近年になって、医療におけるケアの重要性が再び認識されるようになりました。

その理由はいかに医学技術が進んでも、それだけでは人は癒されないということがはっきりしたからです。むしろ進歩した医学技術によって、いのちは取り留めることができたけれど、からだに障害を残したまま長生きをするというケースが増えたからです。

そこで考え出されたのは「生活の質」ＱＯＬ、クオリティ・オブ・ライフという概念です。

「生活の質」とは障害の残った病人が日常生活をするのに必要な能力の高さ、低さを言います。

この「生活の質」に対して、もはや改善の余地のない病気の末期の段階でのＱＯＬがあります。これを「いのちの質」と呼びます。

新しい医学技術や新薬の開発によって、重症患者の延命が可能になるに伴って、治癒させることができずにただ死を待つほかない病人のＱＯＬは「生活の質」ではなく「いのちの質」が問題となります。この末期の段階ではターミナルケアと呼ばれるとおり、ケアが主役です。

「いのちの質」とは心の幸せの状態の良し、悪しを意味しており、自分の今の状態の中で満足しているか、どうかを現わすものです。今の病気の状態がどうであれ、自分が幸せと感じれば、その病人にとってのＱＯＬは高いということができます。

ここでターミナルのステージにある人の「いのちの質」ＱＯＬが高い例と、低い例をご紹介したいと思います。一般にターミナルステージとは病気の末期をいいますが、人生の末期である高齢者も広い意味でターミナルステージにあると言えます。

まず人生のターミナルステージにある一人の老いた医者の「いのちの質」を、彼の書いたエッセイから見てみたいと思います。これは以前米国医師会雑誌に掲載された文章です。

笑い話のような話ですが、次のようなものです。

「私は八十歳代の友人の医師二人と車でレストランに行った。そして車の中で、どの病気なら楽に死ねるかということが話題になった。私は友人たちよりも長生きしそうである。酒も飲まないし、たばこも吸わない。血圧も正常だし、コレステロールも高くない。だから心筋梗塞や脳梗塞で急死することはなさそうだ。すると私が死ぬ病気は苦痛が長く続く癌しかない。これはたいへんだ。友人たちがうらやましい。そこで私は自分の運命にもっと積極的に関わる決心をした。レストランの席に着いてメニューに目を通し、一番厚いレアのローストビーフを注文し、山盛りのフレンチフライを添えてもらった。またこれまでブラックで飲んでいたコーヒーに砂糖と生クリームをたっぷり入れた。そしてウエイターに言った。『すまないがバターをたくさんこっちにまわしてくれないか』」。

この老いた医師は医者であるがゆえに、どんな病気で死ねば苦しみが多いか、少ないかという知識を持っていました。その知識を自分のいのちに当てはめた結果、癌と死の恐怖に恐れおののきながら、何を食べようか、何を飲もうかと毎日心配しながら生きてゆかなければならないのです。人生のターミナルにある彼の「いのちの質」は決して高いとはいえません。

次に人生のターミナルにある「いのちの質」の高い、あるひとりのドイツ人の例を彼の書いた「最上のわざ」と題した詩によって見てみたいと思います。

最上のわざ

この世の最上のわざは何か。
楽しい心で年を取り、働きたいけれども休み、
しゃべりたいけれども黙り、
失望しそうなときに希望をもち、
従順に、平静に、おのれの十字架をになう。
若者が元気いっぱいで人生を歩むのを見てもねたまず、
人のために働くよりも、謙虚に人の世話になり、
弱って、もはや人のために役立たずとも、
親切で、柔和であること。
老いの重荷は神の賜物。
古びた心に、これで最後の磨きをかける。
まことのふるさと（天国）へ行くために。
おのれをこの世につなぐ鎖を少しずつはずしていくのは、
まことにえらい仕事。

こうして何もできなくなれば、
それを謙虚に受け入れるのだ。
神は最後に一番良い仕事を残してくださる。
それは祈りだ。
手はもう何もできない。
けれども最後まで祈ることはできる。
愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために。
すべてを終えたら、臨終の床に神の声を聞くだろう。
「来なさい。わが友よ。われ汝を見捨てじ」と。

これが老いたドイツ人の詩です。聖書には次のような神の約束が記されています。

胎内にいる時からになわれており、生れる前から運ばれた者よ。あなたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう（天国へ）。

（イザヤ　46・3、4）

この神の約束を堅く信じていた老人は、老いから来る心身の衰えを神からの賜物として謙虚に受け取り、何もできなくなっても、愛する者たちのために祈ることができることを感謝し、死を恐れず、残された自分のいのちを神にゆだねて、喜びと希望をもって天国に入る日が近づくのを待ち望むという、すばらしい人生のターミナルの日々を送っていたのです。

これこそ、「いのちの質」が高いと言うべきでしょう。

五、霊の痛みとその癒し

さて、ホスピスの創始者として知られる英国のシシリー・ソーンダース女史は、癌のターミナルステージにある病人には身体的な痛み、精神的な痛み、社会的な痛み、そして霊的な痛みの四つの痛みがあることを明らかにしました。

身体的な痛みはモルヒネなどの鎮痛鎮静剤を適切に使うことによって緩和させることが可能になりました。しかし、かつて私の友人の医者から次のような話を聞いたことがあります。

末期がんで鎮痛薬が効かず、夜も眠れずに苦しんでいた彼の患者がいました。そのとき、ひとりのナースがその患者の足を暖かいお湯で優しく洗ってあげたら、その患者はぐっすり眠ることができ、それを見た彼はたいへん心を打たれたというのです。なぜこの患者は痛みから解放され、安眠することができたのでしょうか。ただ足を洗って気持ちよくなったからでしょうか。

そうではなく、自分の足を優しく洗ってくれたナースの行為の中に、自分が愛されているということを実感して、心が平安になったので、苦痛をも忘れて安眠できたのだと思います。このように身体的な痛みも、愛に基づくケアによって和らげることができるのです。

精神的な痛みとは、孤独感や家族や親しい者との別れなどによる心の痛みであり、これもまた周囲の人々の愛に基づく思いやりのケアによって緩和されます。

社会的な痛みとは死後における家族の生活の心配や、やり残した仕事への執着や、自分が社会から忘れ去られるのではないかという寂しさなどに悩むことなどであり、これにはソーシャルワーカーや友人などの協力、支援が必要になります。この場合もまた愛のある配慮が必要であることは申すまでもありません。

そして、末期の癌患者のケアだけでなく、高齢者のケアにおいても、これと同様の愛に裏づけされたさまざまな配慮から出た行為が、ケアを受ける側とケアを行なう側との間に心の絆を通わせ、良い結果をもたらすのは間違いないところです。

四番目の霊的な痛みとは、自分はなぜ死ななければならないのか、あるいは死後自分はどこに行くのだろうかという不安、恐怖です。

信仰を持つ、持たないに関係なく、人間は霊的な問題意識を持ちます。画家ポール・ゴーギャンは「われわれは何者なのか、どこから来て、どこに行くのか」という題の有名な絵を残しました。

この疑問は人間の霊から出たものであり、人間だけが持

つ疑問です。そしてこの疑問に答えることができるのは聖書だけです。聖書は人間が何者か、どこから生れたのか、どこに行くのか、そしてまた、このような疑問を抱かせる霊とは何かを明確に語っています。

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。

（創世記　1・27）

神である主は、土地のちり（物質）で人を形造り、その鼻にいのちの息（神の霊）を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記　2・7）

この言葉は人間がほかの動物とは本質的に区別された存在であり、神が人間をご自分との親しい霊的な交わりができるように特別に造られたことを現わしています。よく人間のいのちは尊いといいます。しかしなぜ尊いのかと聞いても答えられる人はなかなかいません。

その答えは聖書だけにあります。すなわち人間のいのちが尊いのは、人間の尊厳性は、人間が神の形に造られ、神のいのちの息が霊として吹き込まれ、神と交わることができる霊的存在だからなのです。そして、「自分は死後どこにいくのだろうか」という疑問は、人間が死を恐れる思いから出たものであり、この疑問は人間の霊の働きであり、人間だけが持つ霊的痛みなのであります。

六、尊厳死とリビング・ウイル

ここで尊厳死について触れてみたいと思います。

尊厳死とは生命維持装置や延命技術の発達、普及によって、病の末期にある人間の尊厳性が無視されるような状態で、無理やりに生かされることが多くなったことに対する批判から生れた概念で、具体的には本人の明確な意思表示があれば、その意思を尊重して、いたずらな延命のための措置は打ち切り、人間が尊厳性を保って自然に死を迎えるようにすることです。

この尊厳死に関連して、リビング・ウイル（訳すと生前有効の遺書、あるいは事前意思表示書）の運動が盛んになってきました。リビング・ウイルには「日本尊厳死協会」の書式のほか、さまざまなものがあります。しかし、せっかく書かれたリビング・ウイルも、家族の反対などで本人の意思が無視されることが少なくないのが実情です。反対の一つの理由として考えられるのは、死ねば終わりであり、永遠に別れなければならないから、一日でも長く生きて欲しいという、家族の死に対する恐れ、悲しみが強いからではないかと思われます。

そこで、この四月に悪性リンパ腫で、六五歳で亡くなったひとりの女性の「医学的処置についてのお願い」と題した次のようなリビング・ウイルを紹介します。

「私の病が不治であり、かつ死が迫った場合に備えて、私の医療に携わってくださっている方々に次のことをお願いいたします。一、私の病が現在の医学では不治の状態であり、すでに死が迫っていると診断された場合には、死期を引き延ばすための延命処置（たとえば人工呼吸器の装着、心臓マッサージ、電気ショック、気管挿管、薬剤による蘇生行為、胃管による無理な栄養補給など）は一切不要です。二、ただし、私の苦痛を和らげる処置は、最大限に実施してください」

ここまでは、どのリビング・ウイルにも共通しています。しかし、彼女は続けて、なぜ延命処置を断るのか、その理由を次のように記しています。

「私は天地万物を創造された主なる神様、御子イエス様を信じております。私がこの世に生を受けたことも、今まで生かされて来たことも、また天の御國へ凱旋する時も、すべては主イエス様のみこころであり、ご支配されていることであると信じています。ですから『すべては時にかなって最善である』と信じることができ、喜ぶことができます」

このような文章に続いて次の聖書の言葉が記されていました。

私たちの住まいである地上の幕屋（病んだり、痛んだりする地上に生きる不完全なからだ）がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家（病むこともなく

苦しむこともない、永遠に生きる完全なからだ）です。私たちはこの（地上の）幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主（神）のみもとにいるほうがよいと思っています。

（2コリント　5・1、2、7、8）

なぜ延命処置を断るのか、なぜ喜んで死を迎えられるのか、その理由が、このように明確であれば、医療側も、家族も納得するのではないでしょうか。彼女は、神が御子イエス・キリストを自分の身代わりに十字架にかけてくださったほどに自分を愛してくださったことを心から感謝し、その神に自分のいのちをゆだねることができました。その信仰に答えて神が彼女の霊的痛みを完全に癒してくださり、彼女はこのように死は終わりではなく、むしろこの世での肉体を脱ぎ捨てた後には神の用意してくださる天にある永遠の住まいに入ることができるという確信を、天国に凱旋するという表現で言い表し、希望と喜びをもって、安らかに死を迎えることができたのです。彼女の「いのちの質」はまことに高いと言えます。

七、死は終わりではない

確かに私たち人間は本能的に死を恐れます。高齢者の中には自分はもう十分に生きたから、いつ死んでもいいと言う人はあるかも知れませんが、心の奥底には未解決の死後への恐れがあるはずです。死が目前に迫っている病人に対して、家族や周りの人々も真実の慰めの言葉を知りません。「がんばって」とか「だいじょうぶ」などと励ましても、その言葉は病人にも、言っている本人にも空しく響くだけにしか過ぎないでしょう。まして、あした何が起こるかさえ知ることのできない人間には「なぜ生き、そして死に、死後には何があるのか」と、いくら考えてもわかるはずはありません。けれども聖書はこう言っています。

神はそのひとり子（イエス・キリスト）を世に遣わし、その方によって私たちに、（永遠の）いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

（1ヨハネ　4・9、10）

見よ。神の幕屋（神の住まわれる天国の住まい）が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（黙示録　21・3、4）

これらの言葉によって、神はすべての人間にとって一番大切なことは神の愛を受け入れることであることを私たちに告げ知らせてくださっているのです。この神の愛を心を開いて素直に受け入れた人々は、神の愛に満たされ、心安らかに生き、そして死は終わりではなく、死後には自分を愛してくださる神とともに永遠に生きる幸せが待っていること、また死は天国で永遠のいのちに生きる出発点であることを確信して、この地上での死を高い「いのちの質」をもって迎えることができるのです。そのような人生を自分も生きたいと心から願うならば、神はその願いを喜んで聞き入れてくださいます。聖書に、

彼が、わたしを呼び求めれば、わたしは、彼に答えよう。わたしは苦しみのときに彼とともにいて、彼を救い彼に誉れ（天国の国籍）を与えよう。わたしは、彼を長いいのち（永遠のいのち）で満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう（体験させよう）。

（詩篇　91・15、16）

神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

とあるとおりです。

これまでお話してきたことからおわかりのように、さまざまな不安、恐れを心に抱いている高齢者が幸せになるには、いくら医療や介護の制度を整えてもそれだけでは不十分なのです。

また最近、人間に代わって働くロボットの研究が進んでおり、近い将来にはすべての介護作業が行なえるようなロボットも開発されることでしょう。しかしどんなに精巧にできたロボットでも、ロボットに世話をしてもらったり、ロボットと話しをしたりする自分の姿を想像したら、幸せどころか惨めな気分になるのではないでしょうか。それはいくら人間に似たロボットでも、ロボットには心がないから、愛がないからです。

けれども、ここで考えなければならないのは、ともすれば私たちもロボットのように機械的に高齢者に接してしまうことがありはしないだろうかということです。

今日は高齢者の幸せのためにというテーマでお話をさせていただきました。

高齢者が幸せと感じるのは自分が心から愛されているときであること、そして、それには限りある人間的な愛ではなく、自己犠牲の愛に立つケアが大切だということであり、それによって初めてケアする側とケアされる側との心の通った信頼関係が成り立つということを知っていただければ幸いです。

入居者の中には素直に感謝してくださる方ばかりでなく、わがままを言う方や、認知症などのため自分のことがわからない方もおられるでしょう。そういう方にこそ、愛の心をもって接していただきたいと思います。

最後に次のことを申し上げて終わりとさせていただきたいと思います。

皆さんの日々のお仕事はたいへんにご苦労の多いこととお察しします。その中にあって仕事の重荷に疲れ苦しまれるとき、難しい問題に出会って思い悩まれるとき、次の聖書の言葉を思い出していただけたら、きっと心が慰められ、楽になられることと思います。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（私たちを愛してくださる、生ける、まことの神）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、この世が与えるのとは（この世的な、一時的な平安とは）違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネ　14・27）

今日このように皆さんにお話しできたことを私はたいへんに幸せに思っています。このお話が少しでも皆さんのお役に立つことをお祈りしております。



重田定義
東海大学医学部名誉教授。
慶應義塾大学医学部専門部卒業。
東京都出身。





神の家

青柳 惇

神の目的

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

（ローマ　8・29）

この聖句には、永遠からの神様の目的が記されています。

神様のご目的は、御子イエス・キリストを長子とする永遠の神の家を建てることです。誰がその家族となるのでしょうか。それは、自らの意思でイエス・キリストの福音を信じる人たち、すなわちイエス・キリストの十字架上の死による贖罪と、三日目の復活を通しての新生（永遠のいのち）を、信仰をもって信じる人たちです。

神のからだ

いま現在、神の家はどのような状態にあるのでしょうか。

長子であるイエスさまは、この家の頭（かしら）として、いま天の高いところの父なる神の右に着座しておられます。家族のその他のメンバー、すなわちイエスさまを信じる人々はこの地上にいます。

これらの人たちを総称して、「キリストの教会」と言います。またこの二つを合わせて「からだ」にたとえます。すなわちからだの頭（かしら）は天におられるイエスさま、からだのその他の部分（からだの肢体と器官）が地上の私たち信者です。

そしていま天と地に分かれている頭（かしら）とからだを繋いでいるのが聖霊です。聖霊は、地上にあるからだの諸部分を、天におられる生ける頭（かしら）キリストとの交わりに導き入れるため、天から下られ、からだの部分一つひとつに宿られています。

その結果、地上にあるからだなる教会と、天におられるその頭（かしら）キリストとが一つとされる、言い換えれば、キリストと教会が一つに結び合わされているのです。

からだの内と外

同じく地上に生息していても、このからだに属してからだの内にある者と、からだに属さないでからだの外にある者とは全く異なります。からだの内と外の間には、その両者を隔

てる目に見えない壁があるのです。からだに属さない人たちは地上のことのみを考えます。そして地上において刻まれる限られた時間のみを数えます。

これに反して、からだに属する人にとって大切なのは、頭（かしら）なるキリストのおられる天のことです。それに比較して地上のことは、どれもこれもそれほど大きな意味を持ちません。

あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。（1コリント　12・27）

神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。（1テモテ　3・15）

真理の柱・土台である生けるまことの神の教会を建て上げるために、キリストのからだの部分である私たちは何をしなければならないのでしょうか。

自分を捨てる

先ず第一に、「自分のいのちを捨てることだ」とイエスさまはおっしゃいます。

自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。（ルカ　9・24）

「いのち」とは原語では「たましい」のことだそうです。自分のたましい、すなわち、自分の考え、自分の感情、自分の意思のことを指しています。

ですからここでイエスさまがおっしゃっていることは、自分の考えや感情、あるいは自分の意思を捨てて、自分を空っぽにして、代わってイエスさまにその座を明け渡すこと。具体的には、イエスさまの御霊に自分の中で働いていただくことです。

「自分のいのちを捨てる」とは、言い換えれば、自分を否定すること、自己否定にほかなりません。この世における自分の名誉や財産を偶像視して追い求めるのではなくて、もっと大切なものに心を留め、目を天に向け、永遠に続く宝物を求めるべきであると聖書は言います。

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。（マタイ　6・19〜21）

教会の一致

生けるまことの神の教会をしっかりと建て上げるために必要な第二の点は、私たちからだの各部分が一致することです。

人間の体でも肢体の各器官がそれぞれの役目を忠実に果たすかたわら、各器官相互間に調和や有機的な補完関係がないと、体全体が病んでしまいます。同じように、キリストのからだである教会も、それを構成する兄弟姉妹の主にある一致が何よりも必要となります。

キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ　4・16）

試練に耐える

主のからだなる教会を建て上げるに当たっては、さまざまの困難や試練があります。それはサタン（悪魔）が妨害するからです。サタンは神の教会が建てられることを何とか妨げようと、そのために信者が一つになることに対してあらゆる手段で攻撃を加えます。

従って、キリストのからだなる教会を建てるために必要な第三の点は、試練や迫害にしっかりと耐えることです。サタンの攻撃に対して揺り動かされることなく、神様の永遠のご目的から目を逸らさないこと。そのようにして兄弟姉妹が一致して、相携えて歩みを続けるとき、主の祝福が約束されています。

また、サタンがそのように暗躍するのを神様が許しておられるのは、その試練に耐え抜いて、兄弟姉妹がたくましく主のしもべとして成長し、やがて彼らがキリストに似た者へと少しずつ変えられていくのを待っておられるからです。

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、

神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。
（ヤコブ　1・12）

この世からの分離

永遠の神の家を建て上げるという神様のご目的の一端を担わされている私たちに、今この世のことにかかずらっている暇はありません。

聖書は「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。」（2コリント　6・17）と記しています。私たちはこの世から分離しなければなりません。しかし私たちはこの世から分離しても、間違ってもこの世から逃避してはなりません。「分離」は「逃避」とは違います。

私たちが属するのは天の神の家であって、私たちはこの世のものではない。従ってこの世では私たちに為すべきことは何もないとばかりに、無為と怠惰に過ごすことは許されません。同様に、私たちに「救われた者の驕りや高ぶり」が決してあってはなりません。

救いは、私たちの自分の行いによるのではなく、神様からの一方的な恵みです。

神の家の完成
――小羊の婚姻

この世の生活は、私たちにとって天国へ向かう準備期間です。

いろいろな患難や攻撃にもかかわらず、私たちが悩みながら苦しみながらも、喜んで忠実にこの世の務めを果たすその姿こそ、イエスさまの御姿に似たものとして、イエスさまのかおりを放ちながら、私たちの周りの未信者の方の心の目と耳を開いて実を結ぶのではないでしょうか。

そして時が満ちて、私たちキリストのからだが引き上げられて、頭（かしら）なるキリストと一つになることができるのです。今は天と地に分かれている頭（かしら）と肢体が、名実共に一体となって神の家が完成するのです。

このことを聖書では小羊（イエスさま）と花嫁（からだなる教会）との婚姻にたとえています。

また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。
「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。」御使いは私に、「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい。」と言い、また、「これは神の真実のことばです。」と言った。
（黙示録　19・6～9）

このすばらしい婚姻に与かることなく、なお地上に残される人が一人もいないように、いま私たちは主を証しする器として、私たちの中で聖霊が働いてくださるように、日々祈り続けたいと思います。





青柳　惇
一九三八年京都生まれ。桂高校、京都大学法学部卒、東京銀行取締役退任後、ソテックスコーポレーション社長・会長を経て二〇〇二年退職。著書「若い日に創造者を覚えよ」

あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。

仲井間憲成



聖書は、真理を求める者に元気、勇気、喜び、生きる力を与えてくださる、いのちの書です。聖書の中に、次のような素晴らしい文章が書かれています。

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。（ローマ　4・5）

「不敬虔な者」とは、神様にそっぽを向いている者、神様を認めない者のことです。「義」とは、神様から見た本当の正しさのことです。そして、人は誰一人としてそのような「義」をもっていません。神様が罪を赦し、正しい者と認めてくださるのです。

私たちは、「これは正しい。あのやり方、考え方はおかしい。」というように、自分の尺度で正しさの判断を下してきたのではないでしょうか。しかし、神様は違います。義人は一人もいないのをご存知の上で、ご自身の尊いあがないを通して、罰すべき人を赦し、恵まれるはずのない人たちに恵みを与えてくださるのですから、驚きです。

「私は咎ある者として生まれた。（詩篇　51・5）」とダビデ王が嘆いたように、人間は生まれながらに罪を犯す性質を持っています。そして、罪人は必ず死ぬことが定められています。聖書は「罪から来る報酬は死です。」（ローマ　6・23）と言っています。

では、「罪」とは、どんなものなのでしょうか。

人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。

（マルコ　7・20～23）

イエス様は、これら表面に現れることだけでなく、心に悪いことを思うだけでも「罪」だと言われました。また、世間の慣習にとらわれて思い悩むことも、神様を信頼しない「罪」だと言われました。

わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を

着ようかと心配したりしてはいけません。（マタイ　6・25）

これら「罪」の中での最悪の「罪」は、高ぶり・高慢ではないでしょうか。神様はおっしゃいました。

わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む。（イザヤ　57・15）

心砕かれてへりくだった人は、神様がともに住んで下さいますが、生まれながらの人間の本質は、高慢です。

一般的に人生の目標とされる、生きがいや自己実現を求める自己追求型の生活は、神様のおっしゃる「へりくだり」とは正反対の、罪にまみれた生活です。「自分が、自分が」と自己中心に物を考える態度は、高慢そのものです。しかし、人は誰も、そのような罪の性質を生まれ持っているのです。

このような罪深い私たちを、神様が正しい者と認めてくださる。と、聖書は言うのです。

神が義と認めてくださるのです。（ローマ　8・33）

それではどのようにして、神様はご自身の正義を保ちながら、私たちの罪を赦すことができるのでしょうか。罪のないひとり子イエス様を、私たちの罪の身代わりとして処刑することによって、私たちの罪を赦されたのです。その罪のあがない、すなわち「十字架の死」をなしてくださったイエス様を信じる者は誰でも、義と認められます。

イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。（ローマ　3・22〜24）

不敬虔な者を、義と認めてくださる方を信じる信仰。その信仰を得るために、私たちは何をしたら良いのでしょうか。

イエス様の弟子たちを迫害していた看守の救いを例に、考えてみましょう。

パウロとシラスを牢屋に閉じこめた看守は、真夜中の地震でパウロたちの鎖が解き放されるというイエス様のみわざを目のあたりにし、おのののいてひれ伏しました。

ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。」と言った。ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。（使徒　16・30、31）

看守は、パウロたちの言葉に素直に耳を傾け、イエス様を信じて救われました。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。（ローマ10・17）

イエス様のことばを「聞く」ことが、信仰に導かれるための第一歩です。サマリアの多くの人たちは、井戸でイエスさまに出会ったご婦人の話を聞いて導かれ、主イエスのことばによって信じました（ヨハネ　4・41）。

私たちのキリスト集会でも、イエス様に救われた方々の「証し」を聞いて信仰に導かれた人々がいます。

その一方で、なかなか信じることができない人もいます。

わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。互いの栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。（ヨハネ　5・43、44）

自分の中に高ぶりがないか、省みたいものです。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。（詩編　139・23、24）

ここまで、人が生まれながらにしてもつ「罪」とその「赦し」について、救われるための心の備えについて、考えてきました。最後に、救いに導かれたクリスチャンとしての歩みについて、考えてみたいと思います。

イエス様を救い主と信じる者の罪

あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。

パウロは、イエス様の救いの素晴らしさを賛美しつつ、いつまでもなくならない罪への罪悪感も強めていました。

しかし、聖書は語っています。悔い改めたその瞬間に、すでにその罪は赦されていると。悔い改めと罪の赦しが同時に行われることは、素晴らしいことです。赦されるという体験によって、天の御国への道を歩んでいることを確信できるからです。

しかし私たちは、次のことばを軽んじてはなりません。

招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。

（マタイ　22・14）

天国への招きに、心の備えができている人は少ない、という指摘です。それでもイエス様は、今日も忍耐強く、神様のおられる天国、私たちの故郷である天国への憧れ、渇望なども、「聖霊」の働きの証拠です。

聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であられます。

（エペソ　1・14）

与えられた「聖霊」によって私たちは、この地上においても、天国のすばらしさの片鱗を味わうことができるのです。そして、天国への憧れや情熱だけでなく、天国に行くために必要な労苦に耐えうる力をも与えていただけるのです。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ　7・24）

は、イエス様の血のあがないによって聖められています。律法学者ニコデモは、イエス様に、「神の国」について尋ねました。

イエスは答えて言われた。「…人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。…」

イエスは答えられた。「…人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。

（ヨハネ　3・3～5）

新しく生まれるとは、イエス様の「聖霊」を宿すことです。しかし、聖書に精通していたニコデモでさえ、イエス様のことばが理解できませんでした。



すべての人に呼びかけておられます。

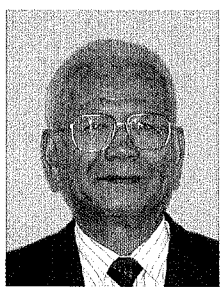
渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

（黙示録　22・17）

招かれた私たちは、この地上においても、豊かないのちの注ぎを受けることができるのです。ただ、ありのまま、イエス様の前に進み出るだけで良いのです。

罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、
ーあなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。ー

（エペソ　2・5）



仲井間　憲成
那覇高等学校、広島大学工学部卒、徳島大学医学部卒、前黒部市民病院副院長、医療法人西能病院勤務。

あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。



私自身こそ罪人、と気づかされました。

藤田亜紀

私は一九七三年に北海道の十勝平野に生まれました。父母、祖父母は酪農と養豚を営んでいました。父母と祖父母、兄、姉二人と、末っ子の私の八人家族で育ちました。家族や知人にクリスチャンはおらず、私自身も聖書に触れる機会のないまま高校を卒業しました。

人とのかかわりに苦手意識を感じていた私は、医療や教育のように直接、人とかかわる仕事は避けたいと思い、会計士を目指して小樽の商科大学に進み、一人暮らしを始めました。その頃は「神などいない」となぜか確信していました。むしろ『神』という言葉を持ち出す人に腹立たしさを感じていました。

そんな私が神様を信じるきっかけとなったのは、商科大学一年目の社会学の講義でした。その講義は、学生がグループを組み発展途上国の問題に関して調べたことを発表する、という形式で行われました。貧困と飢餓、エイズのまん延、大企業の搾取、内戦の実情などテーマは多岐にわたっていました。これらの講義を通して「この世界はどうしてこれほどまでに悲惨なのだろう」という思いを抱き、飢餓や貧困について本を読んだり考えたりするようになりました。そのような中で私が感じたのは「組織的なものや制度的なものだけでは、貧富の差を縮めることも争いをなくすこともできない」ということでした。どんなに立派な理念を掲げた組織であっても、人間の作り出したものに根本的な解決は望めない、と思いました。すべての人の、一人一人の内側にある自己中心の累積が、搾取や貧困を生み出しているように感じたからです。「この世界は所詮、自己中心的な人間の群れに過ぎず、その中で何もできずにただ生きているだけの自分の存在など、あってもなくても同じではないか。」と思いました。

そのころの私は、人間関係においても「自分の無意味さ」のようなものを漠然と感じていました。自分の存在の無意味さを思うと死にたくなりました。しかし死ぬ勇気もなく、何とか自分を保つために、何か信頼できる確かなもの、はるかに自分を超えて自分を貫く中心軸のようなものを求めていました。

哲学書など、さまざまな本を読んでみましたが、それらの中に信頼できる確かなものを見つけ出すことはできず、むなしさが増すばかりでした。

その頃、瀬戸内寂聴さんの般若心経という本が流行しており、それを買うため書店に行った時、その本の隣にあった一冊の本、『学生に送る人生の書―キリスト教入門』という本に目がとまりました。内村鑑三の弟子である矢内原忠雄氏が書いた本でした。その本の初めのページには、次の聖書の言葉が記されていました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

（マタイ７・７）

そして次のページには以下のような学生と教授の対話が記されていました。

学生いわく「先生、私は自分の無力を知り、どうしたらよいかわからなくなりました。」

それに答えて教授は「自分の無力を知ること

は、確実な人生のより頼みを発見することの第一歩であり、必要不可欠なことです。私は、君が、自分というものに自信を失ったことを祝福します」と語ったのです。

確実な人生の『より頼み』があるのだということ、無力を感じたことはその第一歩であったということを本の冒頭で示されて、私は聖書を読みたくなりました。

そして、以前高校の校門で手渡され、そのまま段ボール箱に納めていた新約聖書を取り出して、最初から読み始めました。聖書の言葉は少しずつ心に入ってきました。

さばいてはいけません。……あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ…。

（マタイ 7・1、2）

究極的にはすべての人は自分勝手なのだと結論づけていた私は、愚かなことに「その『自分勝手なすべての人間』の中に自分自身も含まれている」ということに気づいていなかったのです。自分の自己中心をすっかり棚に上げて、すべての人をさばいていた私は、聖書を神様の言葉として受け取ってはじめて、「私自身こそ罪人である」ということに気づかされました。

そして聖書を読み進めると、イエス様の十字架刑の場面が、私の心を捉えました。イエス様は自分を殺す者たちのために祈ったのです。

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

（ルカ 23・34）

死ぬべきなのは私であるのに、こんなわきまえのない私のためにイエス様は祈ってくださっている。死ぬべき私の代わりにイエス様はご自分のいのちを捨ててくださったのだ、と思いました。閉塞していた私の心に光がさしこみ、それまで感じたことのない、あたたかい静かな平安で満たされました。このイエス様は私とは全然違う。イエス様には自己中心のかけらもない。本物だ、と思いました。

私は、イエス様に自分の人生の中心軸になってもらいたい、このイエス様を伝えたい、と思いました。そして人と直接かかわる仕事につきたいと思い、医療に携わりたいという気持ちが与えられました。そして小樽商科大学を中退し、再受験をして山形大学医学部に入学しました。

山形に引っ越した週に、近くの教会に初めて行き、その夏に洗礼を受けました。六年間その教会に集いました。

卒業後、東京の病院に就職し、東京の教会に通い始めました。その教会は聖書を大切にする教会でした。牧師先生とは、よく聖書を学ばせていただきました。職場の同僚がイエス様を信じ喜びに満たされるなど、本当にイエス様は生きておられると感じることが多くありました。しかし、二〇〇七年の春頃から何か違和感を覚えるようになりました。教会がイエス様とは違う方向に進んでいると感じる事柄がいくつかあり、何度か牧師先生と話したりメールをやりとりしたりしましたが平行線でした。

ある日私は、一人の教会役員の方と口論をしてしまいました。人間的な思いでその方をさばいてしまったのです。でも、この件では、主にあって和解が与えられました。「さばいてはいけません」という前述のみことばによって悔い改めに導かれ、翌週その方に「自分を棚に上げて、あなたをさばいてしまった私を、どうかゆるしてください」と頭を下げることができたのです。

一方、その時点でも、教会についての牧師先生とのメールのやりとりではずっと平行線でした。私は途方にくれました。この教会に集うことは自分にとって、もう難しい、と思いました。そして、どうしたらよいかわからず、祈りました。形式や組織にとらわれずに、イエス様だけを仰ぎ見て、イエス様だけを伝えたいのです、と祈りました。

そんなときに、以前聞いたことのある、形式や組織にとらわれずにイエス様を伝えているベックさんのこと、キリスト集会のことが心に浮かびました。そしてインターネットで、キリスト集会、吉祥寺、で検索し、ホームページで地図を確かめ、翌週吉祥寺キリスト集会の礼拝に

足を運びました。礼拝中に聖書の言葉の一つ一つが心に入ってきて、涙が出てきました。イエス様がとても近くにいて「わたしはここにいるよ。」と言ってくださっているようでした。ただイエス様だけに、私の中心となっていただきたいと、強く思いました。十四年前、イエス様に出会ったときのような気持ちでした。どうしようもない私をイエス様は再び引き寄せてくださり、初めの愛に立ちかえらせてくださったのだと思い、なつかしさとありがたさで満たされました。

その後、私自身は大切な方々のためにあまり祈ることができなかったのですが、集会の皆様の心からの祈りと、イエス様の一方的なご愛によって、次々にさまざまなことが起こりました。父や母、友人、患者さんやそのご家族が、家庭集会や喜びの集いなどに参加してくださいました。私にとって大切な方々が、イエス様を中心とした、このような交わりに加わっていただけたことは、本当にうれしくありがたいことでした。

相変わらず無力でわがままで、どうしようもない私ですが、自分ではなく、ただイエス様に働いていただきたい、内に住みたもうイエス様の働きを妨げることのないようにと、今、心から願っています。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ 53・5、6）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ 2・20）

藤田 亜紀（ふじた・あき）
1973年北海道生まれ。清水中、帯広三条高卒、
小樽商科大学中退、山形大学医学部卒。
城南福祉医療協会大田病院勤務を経て
医療生協養生会菊坂診療所所長。



左から父・秀明さん、渡邉さん、芳竹勝也さん、母・敏枝さん、亜紀さん、上田さん、芳竹麗子さん

「私たち」の教会から「イエス様」の集会へ

伊澤 聡一郎

私がイエス様と出会ったのは十歳の時でした。通っていた小学校の校門で白人女性がたどたどしくもていねいな日本語で「イエス・キリストの生涯」の紙芝居をしていました。紙芝居はイエス様が十字架につけられるところにさしかかり、丘の上には三本の十字架が描かれていました。

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

（ルカ 23・39〜43）

この場面が最も心に迫り、この犯罪人のようにはっきりとイエス様を信じる決意をしました。そのことを姉に話すと近くの教会に連絡をしてくれて、教会学校に行く生活が始まりました。夏にはキャンプに参加し、信仰に燃える思いが与えられて、天国とはこのようなものかと喜びました。一方、両親は、私が教会に身も心も捕われているのではないかと心配し、信仰に反対するようになりました。大学生となり上京してからは、両親がイエス様と出会うことなく亡くなってしまうのではないかと、びくびくする日々を過ごし、帰省の度に教会に誘い、イエス様の話をしました。しかし私の思いは伝わらず、それどころか、母の方から「宗教に頼る人間は弱い人間だ。」「人間は進歩し、進化する。宗教は古くて馬鹿な人間が信じるものだ。」と責められる始末でした。

三十三歳で結婚し、妻に「結婚後は集会に集ってほしい」と幾度も懇願されましたが、当時の私は教会生活に満足していました。不思議な経緯で導かれた教会の団体から離れることが主の御心とは思えませんでした。しかし、結婚式は皆様に支えられて集会で行いました。

結婚して数年経ち、車通勤で聞くラジオに飽きてきて、家にあったベックさんのメッセー



左から妻・恵美さん、聡一郎さん、前列 次男・雄平さん、長女・響子さん、長男・慎太郎さん

ジテープを聞くようになりました。その年二〇〇六年の十二月、妻の実家がある近江八幡で集会のキャンプが開かれ、初めて参加しました。そして、翌週にベックさんが結婚式のご用で仙台に行かれることを耳にしました。ベックさんが多くの方を信仰に導いておられることは知っていましたし、両親は外出が困難なほど体調が悪化していましたので、貴重な機会であると思い、仙台の実家に両親を訪ねていただけないか、お願いしました。従来気丈であった両親、特に母は、加齢と共に体が思うように動かなくなり、食事もうまくとれなくなり、色々な病院に相談に行くようになっていました。しかし、医師にあまり相手にされず、気休めのような薬を出されるだけで体調は一向に改善せず、それまで絶大な信頼を置いていた医学が老いや死を克服できないことを実感して、大きな絶望を知るようになっていました。母は、機会あるごとに実家を訪ねてくれる義理の妙子母や小笠原みどり祖母の話に耳を傾けるようになりました。また就寝前には集会の音楽のCDを聞き、父も「これが一番ぐっすり眠れるんだよな、薬よりきくんだぁ」と言うようになっていました。

結婚式当日のベックさんのスケジュールはぎっしり詰まっていました。にもかかわらず、ベックさんの方から「結婚式と披露宴の間に時間があるので、その間、家に行ってもいいよ。」とおっしゃってくださいました。私は、感謝とうれしさでいっぱいになる一方、厚かましいお願いをしたことで身が縮む思いもしましたが、聖書の次の言葉が浮かびました。

群衆のためにイエスに近づくことができなかったので、その人々はイエスのおられるあたりの屋根をはがし、穴をあけて、中風の人を寝かせたままその床をつり降ろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。あなたの罪は赦されました。」と言われた。

（マルコ　2・4、5）

ベックさんは実家で福音を語ってくださり、両親はその日イエス様を信じました。三十年近く私の心身を縛っていた荒縄が解かれた時でした。

実は同年の夏に教会の牧師が実家を訪問してくださったのですが、その時は温和な父を怒らせただけでした。

牧師とベックさんは何が違うのだろうか？集会は祝福されて人がどんどん増やされているのに、私の教会や私が知る限りの多くの日本のキリスト教会が、熱心でありながらも低迷しているのは何故だろうか？真剣に考え始めました。その鍵を見つけたくて、さらにベックさんのテープを聞き続け、日曜日になると牧師のメッセージを聞いて、違いを探しました。そうしている時、突然、大きな違いに気がつきました。それは、センテンスの主語が異なっている、ということでした。牧師のメッセージの主語のほとんどは「私たちは」や「私は」だったのですが、ベックさんのメッセージの主語の九〇％は「イエス様」あるいは「主」だったのです。

私は、大きな発見の喜びを持って、そのことを牧師に伝えました。しかし、牧師とのメールや話の結果、牧師の大切にしていることは「私たちはこの世で主によっていかに生きるか」であり、メッセージの主語の大部分が「イエス様は」ではなく「私たちは」になっているのは、必然的な帰結であるということがはっきりしました。

与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければいけません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

（1コリント　3・10、11）

このことで牧師と何度も話し合いましたが、

伊澤 聡一郎（いざわ・そういちろう）
1967年仙台市生まれ。仙台二中、仙台二高、成城大学経済学部、一橋大学大学院経営学修士卒、千代田化工建設（株）勤務、妻恵美、長女響子、長男慎太郎、次男雄平

平行線が続きました。確かに牧師のメッセージでは、つねに、罪からの救い、十字架の贖い、主を第一とすることが語られていましたが、中心軸が「イエスを愛する」ことから「イエスにある自分の人生を愛する」ことに移っているように思え、平安と喜びを持てませんでした。また、この世での生き方を語るメッセージや教会員のためのとりなしの祈りが中心の礼拝は、聖書で語られる「主イエスを拝する礼拝」とは別なものではないか？と考えるようになり、次第に集会に移ることを夫婦で話し合うようになりました。しかし、三十年も集った教会を離れることは、簡単には決断できませんでした。終始誠実に対応してくださった牧師には感謝の気持ちでいっぱいでしたし、戦友のような気持ちすら抱いていた教会の方々と別れるのはとても辛かったからです。しかし、毎朝毎夕聞くベックさんのメッセージの中で、牧師と対極をなす言葉がどんどん明らかになってきました。ベックさんは「天国での希望」を話し、牧師は「この世での生き方」を話します。ベックさんは「目に見えないものに目を留めるよう」話し、牧師は「目に見えるもの」について話します。牧師は私の父に「教会に行くこと」を勧め、ベックさんは「イエス様を信じること」を伝えました。結局のところ、集会の中心は、「イエス・キリスト」であり、「私たちは、生きるにしても死ぬにしてもキリストのものであり、キリストが私たちのいのちそのものである」ということであり、一貫してイエス・キリストから目を離してはいません。

こうして、私は教会を離れる決心をしました。

現在は家族で集会に集い、信仰を共にする方々との良き交流が与えられています。私はこの三十年のキリスト者としての歩みの中で、イエス様への信仰に関しほんの一瞬たりとも失望したことはありません。私の杯は、主からの豊かな恵みでつねに満ちあふれこぼれるものでした。



左から母・明美さん、染野茂夫さん、染野麻衣子さん、染野待子さん、前列 啓さん

眠っている人よ。目をさませ。

松本　啓

私は物心がついた時には、母に連れられて横浜から吉祥寺のキリスト集会へ行っていました。わが家は両親と私の三人家族で、母はクリスチャンでしたが、父は信仰に関心がなく、論理的に納得のいくものしか信じない人でした。父が航空会社のサラリーマンでしたので転勤が多く、私は幼稚園時代を大阪、中学に進学した時は愛知、浪人と大学時代はまた大阪で過ごしました。イエス様は、行く先々で集会を備えてくださいました。

しかし、母に連れられていただけの私は、中学生になると学校の友達といっしょにいる方が楽しく、あまり集会へは行かなくなりました。それでも、なぜか食事や寝る前に祈ること

は続けていました。自分の意思で集会に集い始めたのは、大学へ行ってからでした。何がきっかけにそうなったのか、正直わかりませんが、集会へ行くのがうれしくなっていたのを覚えています。

その後、大学を無事卒業して就職しました。仕事は店頭での販売営業です。土曜と日曜が稼ぎ時の仕事でしたが、自分からそれを選んだのです。土曜と日曜は当然仕事です。日曜礼拝はおろか、家庭集会へも行けなくなりました。

一人暮らしのため、生活は仕事中心で、私の中からはイエス様がどんどん消えていきました。と言うよりも、自分から離れていったのです。大学時代、毎週集会に集うことができていたことで、自分の信仰に対する見方が甘かったのです。

それから五ヶ月ほど経って、イエス様は、そんな私に呼びかけてくださいました。本当は、ずっと呼んでくださっていたのに、自分で耳をふさいでいたのかもしれません。ある日、大阪集会の若い人たちが食事に誘ってくれたのです。私は、当日も遅くまで仕事だからと断ろうとしましたが、私の仕事が終わるまで待つと言うのです。集合場所へ着いたのは午後九時過ぎだったように思いますが、「遅いっ！」という懐かしい声で迎えてくれました。そして、その場では、食前のお祈りをした以外に、イエス様の話をすることはありませんでしたが、このことがきっかけで、イエス様に呼ばれている自分の名前をはっきりと聞くことができたのです。「集会に行きたい。戻りたい」強い気持ちが自分の中に生まれました。しかし、それは試練の始まりでもありました。私にとって、集会に戻るということは、会社を辞めることにつながったからです。

私は集会に戻る前に、本当の意味で自分が小さくて何もできない者であることを自覚し、イエス様と真に向かい合わないといけなかった、と反省しています。

試練は、職場の上司との人間関係で与えられました。その上司、お店の先輩は、会社の中でもトップクラスの販売実績を持つ人で、接客する相手が何を考えているのか、つねに思いめぐらしている人です。その先輩が、お客さんだけでなく、私の心の中も探ってきました。私の内の、集会へ戻りたいという気持ちに気がついたようで、必要以上に私の考えや気持ちを探り始めたのです。私がクリスチャンであることを、いつ、どこで話したのか、はっきりと覚えていませんが、気がついた時には、「仕事と集会のどちらを選ぶのか」というところまで来ていました。この世での生き方を説く先輩の話は、イエス様を否定する言葉にしか聞こえませんでした。話は閉店する午後八時から夜中の十二時過ぎまで続き、そのような日が毎日続くようになりました。最初は反論しようとしましたが、だんだんできなくなり、頭の中は真っ白でした。

何も話せないまま、先輩の怒鳴るのが終わるのを待つだけでした。どのようなやり取りだったかは思い出せませんが、精神的に追い詰められていることは確かでした。

そんな状況がひと月ほど続き、ほとんど反応しなくなった私を見て、先輩は怒鳴るのをやめました。この期に及んでも自分で何とかしようという、傲慢な自分はいたのですが、イエス様は私の口をふさぎました。口をふさぐことで、私を守ってくださったのです。

しかし、それはさらなる試練のはじまりでした。私は、そこまでしないとイエス様を見上げようとしない、傲慢な人間なのです。

先輩は、今度は別の人を通して私を責めてきました。人間関係でうまくいっていた店長を用いたのです。店長は、一度会社を辞めると言った私を引き止め、必要な時には土曜、日曜に休んでもいい、と言ってくれた人です。私がクリスチャンであることを知ったうえで、もう一度いっしょに頑張ろうと言ってくれていました。私はその言葉に「はい」と答えました。今から考えれば、それも私をイエス様から引き離そうとしたサタンの誘惑だったのかもしれません。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ８・38、39）

ある日、朝礼で先輩から「お前なんか、辞めちまえ！」と言われました。店長の引き止めを了承した数日後のことでした。この唐突な先輩の言葉は、会社に残ろうとしていた私の心を、一瞬にして辞める決意に変えてしまいました。今思えば、鬼のような先輩の一言は、「また、わたしから離れようとするのか、戻って来なさい」というイエス様の声だったのでしょう。「分かりました」と私は答えました。先輩はその決意を自分で店長に伝えるように、と私に言いました。この日、店長は非番でしたが、先輩はその日のうちに「あいつは、また辞める気だ」と店長に告げていました。私は店長を裏切った者、とされてしまったのです。

店長は、言葉ではなく、行動で私を追い詰めてきました。辞表を渡した後、結果を聞いても「まだ見てません」という返事。いつ退職できるのか分からない状態が続きました。人目のつかない場所での草むしりと掃除を命ぜられ、存在を無視されたような一ヶ月間は気が狂いそうでした。

精神的に追い詰められていた私は二か月間、食べることも飲むことも、寝ることもできませんでした。しかし、その間の試練を乗り越えらせてくださったのもイエス様でした。朝、お店に行き先輩方が来る前に掃除をするのですが、その一時間弱、実家の母とともに携帯電話で聖書を読み合い、祈り合う時間が与えられたのです。これがなければ、私はとっくに身も心もつぶされていたでしょう。一日を過ごすことさえできなかったでしょう。

来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。主を恐れることを教えよう。（詩篇　34・11）

そこまで体験させられないと、私はきちんと主に顔を向けようとしない人間なのです。

この二か月間で、私は自分が何もできない本当に小さな者であることを思い知らされました。やっとのことで私はイエス様と向かい合おうとしたのです。しかし、イエス様はずっと待っていてくださいました。このような私でさえも、イエス様はちゃんと目にとめていてくださり、名前を呼び続けてくださっていたのです。そして恵みは突然与えられました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。―主の御告げ。―それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

私はふと思い立って、会社の人事課へ電話をしました。すると、私の辞表は受理されているというのです。退社する日も決まっていました。店長は、私の代わりのパートまで手配していました。押しつぶされていた心が一気に解放されました。

イエス様はさらに、次の就職先まで用意してくださっていました。親戚の紹介で、今の会社の中途採用面接を受けることができたのです。本当に感謝の言葉しかありません。

退社の日、私は閉店後、お店の人たちに「お疲れさまでした」とだけ言って去りました。辞表が受理されたことは、店長と私しか知っていませんでしたし、店長の知らないことを私は知っていましたので、そうするしかありませんでした。でも、イエス様は振り向かなくてよいと言ってくれました。心軽やかに、笑顔であいさつして実家に帰ることができました。イエス様に信頼することでこんなにも心が軽くなり、平安が与えられるのかと驚きました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世

松本 啓（まつもと・けい）
1978年沖縄生まれ。上大岡小、光ヶ丘中、
小牧南高、桃山学院大卒、
マツ六（株）勤務

が与えるのとは違います。

（ヨハネ　14・27）

それからしばらくして新しい会社に勤め、集会に集うこともできるようになって、感謝と平安に満たされた日々を過ごしました。この恵みは、たくさんのみことばと家族や集会の方々の祈りがあったからであり、またイエス様の大きな愛と御霊の働きによるものです。私の思いと行動からではありません。私は本当に弱い者です。イエス様がいなければ、イエス様に頼らなければ生きていけない者です。にもかかわらず、すぐに自分の力を信じようとしてしまいます。それを何度も繰り返す愚か者です。そんな私の名前を何度でも呼んでくださる忍耐と愛のお方、イエス様に感謝するばかりです。

眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。

（エペソ　5・14）

祖母・大城紀美子さんと



Information Box［インフォメーション・ボックス］



写真は、2008年11月、94歳で天に召された吉祥寺集会の上田利恵さんが、生前に録音した「聖書朗読のテープ」です。動機は、白内障にかかって「失明するかもしれない」と告げられたことでした。聖書が読めなくなったら、と考えて58歳の時から始めたそうです。本人は失明することはありませんでしたが、遺されたテープは今、ダビングされて未信者のお年寄りや全盲の信者に贈られるなど、主に用いられています。

利恵さんは、それ以前に、分厚い聖書を、創世記、詩篇、ヨハネの福音書などの各書（薄い小冊子）に分けて持ち歩いていました。いつでも聖書を読めるようにという、みことばへの強い飢え渇きによるもので、同じ飢え渇きが「聖書朗読の録音」に駆りたて、結果として「天に宝を積む」ことになりました。

この録音テープの話は、2008年12月1日の葬儀で、ご遺族から紹介されました。その葬儀では、6人のお孫さん全員が「お世話になった思い出」を感謝しつつ語りました。また孫、ひ孫全員16人の即製ファミリー合唱団が日々の歌218番「この世の苦しみ解き放たれて」を賛美し、歌声の切れ目ごとにタイミングよく発せられた、ひ孫の奇声にどっと笑い声が起こりました。厳粛さと、いちまつの寂しさの中に、希望と感謝、そして笑顔も見られた葬儀でした。

聖書は何と言っていますか

—信仰から離れた人に—

ゴットホルド・ベック

第4回



信じていたが離れてしまった。このように言う人は少なくありません。もしあなたがそのような人のひとりなら、信じていた時に悔い改めて回心を経験したかどうかを自分で確かめることが大切です。本当の回心を経験していなかったら、今からでも遅くはありません。悔い改めて、イエス様の前に進み出ようではありませんか。そして、提供されている救いを受け取りましょう。これからが本当のスタートです。しかし、もし回心を経験していたのなら、信仰から外れた原因を捜さなければなりません。以下に主要な六つの原因をあげてみましょう。

1 罪を完全に打ち砕いていたかどうか

回心を経験していたとして、罪を完全に打ち砕いていたのでしょうか。たとえば寒い日が続く冬の時期にときおり暖かい日が混じるかのように、集いの中にいる時にだけ心を主に向けていたのであって、それ以外の時は、心はいつもこの世のことに向けられていたのではないでしょうか。むしろ人目がなければそれをよいことにして、罪にひきつけられ、それに振り回されていたのではないでしょうか。もしそうだとしたら、回心は十分なものではなかったということです。

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父（主なる神）を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

（1ヨハネ 2・15、16）

「もし、右の目が、あなたをつまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体がゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体がゲヘナに落ちるよりは、よいからです。」

（マタイ 5・29、30）






ゲヘナは地獄を意味しています。そこには何の希望もありません。ですから、聖書は、救われた者に対して罪との決別を求めています。

ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。

（ローマ 6・12）

2 イエス様に完全にささげていたか

イエス様はすべての人の主となるために、死んでよみがえられました。救われた者はイエス様のうちにある者として、イエス様を主として生きることが要求されています。あなたはそういう意味で、自分をイエス様に完全にささげていたのでしょうか。主のみこころを第一とし、主に喜んでいただくことを祈り求めて生きていたのでしょうか。それとは違って古い自分のままで生きていたのではないでしょうか。

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

（ローマ 12・1、2）

3 この世と妥協していなかったか

信仰を大切にしたいと考え、この世のことに心が振り回されるようなことはしまいと思っていたとしても、信仰は信仰、この世はこの世とばかりに、この世と信仰をはっきりと分けていたのではないでしょうか。これはこの世のならわしだとか、こうしなければこの世ではやっていけないとか、意識してこの世のやり方を求めることはなくても、それを受け入れて、この世と妥協していたのではないでしょうか。救われた者は、主に従って生きるとともに、世の光として主をあかしする者でなければなりません。



「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」（マタイ 6・24）

「わたし（イエス様）よりも（自分の）父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」（マタイ 10・37〜39）

4 イエス様をあかししたかどうか

救われた者として、イエス様をあかししたでしょうか。あかししたとしても、そのあかしは、主がどのようなお方であり、何をしてくださったかを語るのではなく、自分の経歴や境遇、あるいは仕事の苦労、その成果を語るものであったとしたら、そこには光は射し込みません。大切なことは、自分ではなく主をあかしすることであり、主をあかしするところには光が射し込みます。そのようにして光のなかに置かれている信者は決して道を踏み外すことはありません。

「わたし（イエス様）を人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」（マタイ 10・32、33）

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ 10・10）

5 みことばを、飢え渇きの思いをもって求めたか

飢え渇きの思いをもってみことばを読むことは、「主よ、お語りください」と主の前に膝をかがめ、自分をむなしくして主に求めることです。そうすれば主はみことばを通してお語りくださり、みこころを明らかにしてくださいます。みことばによって日々の力が与えられます。ダビデはみことばを大切にし、つぎのように祈りました。

あなた（主なる神）のみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。（詩篇 119・105）

あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。（詩篇 119・11）

使徒たちも、みことばの大切さを強調しました。

生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。（1ペテロ 2・2）

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。（ローマ 1・16）

6 祈りの生活はどのようなものであったか

信者にとって祈りはイエス様との直接的な交わりです。心の中にあるものをすべて主の前に明らかにし、また聖書を通してお語りくださる主のみことばを受けて、それに答える祈りをもつ信者は主と一つになっています。このような信者は聖霊の導きのうちに歩むことができます。しかし、主との交わりのない者は自分勝手な道を歩み、道を踏み外し、脱落してゆきます。祈りのない信者は舵のない船のようなもので、目的地に到達することはありません。主は祈ることを求めておられます。

絶えず祈りなさい。（1テサロニケ 5・17）

いつでも祈るべきであり、失望してはならな








い…。　（ルカ 18・1）

「神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。」

（ルカ 18・7、8）

主は生きておられます。あらゆる知恵と力をお持ちになっています。主に不可能はありません。祈ると、主は働いてくださいます。大胆に主の前に進み出て、祈ることこそ私たちに必要なことであり、また私たちがいただいている特権なのです。主の恵みを無にすることがあってはなりません。

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

（エペソ 6・18）

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ 40・31）

ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。　（ヘブル 4・16）

主は救われた者を用いたいと望んでおられます。回心した者は、祈りのうちに主とともに、主に用いられて大きな働きができるのです。その時、天には大きな喜びがあることを、みことばによって知らせられています。ですから、私たちは小さな者であっても大きな働きができることをいつも覚えるべきです。それを信じない者は怠け者であり、悪魔の餌食となり、悪魔の勝利になります。毎日、祈りの意味と力をよりよく学ぶべきなのです。信者は、自分のためにではなく主のために働きたい、という思いで生活することが大切です。心の緩みは私たちを受け身にさせ、実を結ばせません。






「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。

さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられる



のです。」（マタイ 25・14〜29）

主は、ある者たちには、ほんとうに喜んで「良い忠実なしもべ」といい、他の者には、「悪い怠け者のしもべ」と仰せにならざるを得なかったのです。主に救われた者は、主に用いられ、主に喜んでいただくものでありたいと願うべきではないでしょうか。

悔い改めて福音を信じ、救われた者が信仰から離れてしまうことは恵みを無にすることであり、決してあってはなりません。主は真実なお方です。ですから、悔い改めた者が、主との交わりの中にいるなら、信仰から離れるようなことはありえないのです。信仰から離れたとすれば、悔い改めが不十分であったか、この世と妥協していたか、あるいはイエス様を主として歩んでいなかったか、のいずれかです。私たちは日々、悔い改めをもって主の前に進み出ようではありませんか。また、イエス様を第一とし、みことばに信頼し、みことばに従い、主とともにいることを大切にして、豊かに実を結ぶ者となろうではありませんか。





2008年秋ヨーロッパよろこびの集い

2008年秋の「ヨーロッパよろこびの集い」は、C(10月8〜15日、ドイツ・フィリンゲン、77人参加)、D(10月16〜22日、ドイツ・フィリンゲン、82人参加)、E(10月25日〜11月1日、スイス・ベアーテンベルグ、104人参加)の3回にわたって開かれました。

静かな環境とゆったりした時間の中で、礼拝、福音集会、親密な語り合いの時を共有する恵みに加えて、今回は例年以上に自然の美しさを満喫できたようでした。7年ぶりの開催となったスイスでは、会場の聖書学校でアイガー、メンヒ、ユングフラウなどの名峰を眺める日々を過ごし、ドイツでは紅葉が見ごろでしたし、Cグループはティトリス（標高3,020m)、Dグループはエーベンアルプ（同1,644m)と、それぞれスイスの山へ出かけてアルプスの眺望を楽しみました。

p072からp081の写真は喜びいっぱいの参加者たちです。

聖書は何と言っていますか ― 信仰から離れた人に





from Kawagoe
各地の集会から

こちら川越集会で〜す



神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

川越市は都心から約四〇キロ圏に在り、埼玉県のほぼ中央に位置しています。今から十六年前の一九九三年、吉祥寺集会の信仰に心を動かされていた四人の市内に住む婦人が、当時八王子にいらした古田稔・康子さん夫妻を通して、一緒に集まる機会が与えられました。四人は、集会の本を読んで、あるいは親戚・知人に紹介されて、それぞれの道から集会に惹かれていました。そして、古田さんを交えた初めての集まりで、主の導きにより、川越でも四月から家庭集会と日曜礼拝を同時に始めることになりました。

家庭集会は、今は天に召されている堤道子さんのお宅で始まりました。発足当初からベックさんが定期的に来てくださり、長い年月にわたって、あふれる恵みをいただいています。一方、日曜礼拝は、他の婦人のお宅で始まりましたが、当初は数人の女性だけなので、礼拝場所を提供している婦人は、吉祥寺から来るメッセンジャーに対して、とても心苦しく思っていたようです。しかしすぐに男性も加わり、小さな群れも少しずつ増えてきて、家庭的な温かい雰囲気の中での礼拝に、主の祝福を感ずるようになりました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

二年後、礼拝場所を提供していた婦人宅の都合により、新たな所を探さなければならなくなりましたが、一九九五年四月より川越市に隣接する坂戸市文化施設「オルモ」を借りることができ、現在に至っています。

大小二部屋を確保できるので、片方は幼児の遊び場、子どもの日曜学校、中高生会など、主の導きに従い随時、臨機応変に使用しています。礼拝には八王子、青梅などの東京西部や埼玉県西部・北部、群馬県南部など広範囲から来られる方も多く、吉祥寺や御代田にもあまり遠くないので、適宜、交互に参加される方もいます。そのような方々にも支えられながら、地元の群れも、わずかずつですが着実に広がりつつあります。

日曜礼拝・福音集会の後は、机を並び替えて、持ち寄りによる食事の集いがあります。毎回、ぜいたくに過ぎず、粗末に過ぎず、神の家族として語り合うのに、ちょうど適した分が備えられ、主にある喜びを分かち合うことができます。

十六年間の歩みは遅々たるもので、数多くの問題が起こりましたが、主は私たちの祈りに答えてくださり、一つ一つに解決の糸口を示してくださいました。

いつでも祈るべきであり、失望してはならない。（ルカ　18・1）

男性、女性の各祈り会では、家族・親戚・知人の救いのほか、様々の課題が挙げられています。川越集会に集う一人一人は、それぞれに悩みや弱さを持っていますが、恵みに感謝し、主の霊に満たされた集会として用いられるよう、お祈りください。

（飯島弘雄）

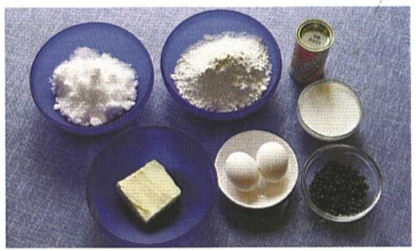
ブルーベリーマフィン





ビッキーのケーキづくり

できるだけ多くの皆さんにお菓子づくりを楽しんでいただきたいので、シンプルなレシピをご紹介しています。
その中でも、このブルーベリーマフィンはとっても簡単。
一つのボールに材料を順番に入れ混ぜて、あとは焼くだけです。
ブルーベリーは、いつでも手に入るドライのものを使いますが、旬の時期なら、フレッシュなものでもいいですね。
ほどよい甘さなので、朝食にもいただけます。
手軽に持ち歩けるので、お出かけ時のランチやおやつにもぴったり。
紙やアルミ箔などの型を使えば、
そのままお友達にあげることもできます。
皆さん、ぜひ試してみてくださいね。



⁂ 用意する道具

マフィン型８個（パウンド型でもよい）
泡立て器、ボール、へら

⁂ ブルーベリーマフィン８個分材料

バター　100ｇ（有塩でもよい）
砂糖　140ｇ
卵　２コ
牛乳　120cc
ドライブルーベリー又は生ブルーベリー
50ｇ～100ｇ（お好みで）
小麦粉　200ｇ
ベーキングパウダー　小さじ2杯
塩　少々

作り方

1 材料は常温にもどしておく
小麦粉とベーキングパウダーは合わせ、ふるっておく



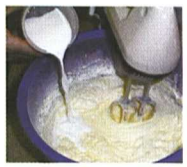
2 バターを入れ、クリーム状になるまで練り、砂糖を数回に分け入れ白っぽくふっくらするまで丁寧に混ぜる



3 卵を1個ずつ入れ混ぜる
塩を加える
※ここで牛乳を入れてもよい



4 ふるっておいた粉を数回に分け入れ、混ぜる



5 牛乳を少しずつ入れ生地がなめらかになるまで混ぜる



6 ブルーベリーを入れ混ぜ合わせる



7 型に入れる



8 180℃で約20分間焼く
焼き上がりは竹串をさし確認









2008年
9/4　平櫛 久和
9/8　高橋 包子
9/14 田中 有紀子
9/15 佐藤 美津
9/15 磯口 あゆみ
9/23 上松 友七
9/25 小山 佐和子
10/5　与儀 トミ
10/17 石川 岳司
10/30 五十嵐 虎雄
11/7　野田 正信
11/11 藤本 シゲ
11/13 高野 宏
11/17 中村 吉伯
11/25 佐藤 義昭
12/1　上田 利惠
12/16 金田 義朗
12/28 田中 テル



















葬儀
Funeral

2009年
1/6　松島 信子
1/7　荒川 貴光
1/27 大野 昭
1/31 遠藤 由喜子
2/3　谷原 暲一
2/12 上松 竹志
2/13 東　登
2/24 芝田 とよ子
2/27 水田 収三
3/3　三沢 しげ子
3/10 山本 保義
3/10 高元 喜代美
3/17 神山 知里
3/20 辻 津智
3/22 田中 顕雄
3/23 牧野 冨美子
3/25 福良 進治
4/1　澤田 良子
4/20 堀 真由美

しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、
すなわち天の故郷にあこがれていたのです。
それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。
事実、神は彼らのために都を用意しておられました。
(ヘブル 11・16)















結婚式と葬儀のご報告



2008年
9/13
張替 永信・主美

12/14
景山 佳彦・佑子



結婚式
Wedding

みことばに心を留める者は
幸いを見つける。
主に拠り頼む者は幸いである。
(箴言 16・20)

2009年
1/31
浅沼 宏之・陽子



3/7
森 一仁・南





4/18
山口 泰史・恵三



3/8
佐々木 喜一・陽子